紀伊國名所圖會

一之卷下

和歌山部

紀伊國名所圖會卷之一之下

府城

寄合橋
名草焼陶器
馬ヶ瀬
青岸
伊達神社 松尾神 竈山神
雄之芝
卍ヶ辻
安養寺 雄夫権現
吹上寺
弐宮旧趾
名藏院 大師堂 潜穴
光明院 大阪天王 紙園社 王舟観音 西方寺
亀ヶ坂 阿伽石 地蔵尊 連理松
天狗石
日本忠
西岸寺 舞楽
長覚寺 岸松院 保寿院
務の水
西雲寺
仙人硯

惣門 講堂
類宮 雄之芝 然松大明神 雄之芝の碑銘
燈籠堂
竹法稲荷社
蛭児神社 伊勢両宮 稲荷社
蛭子祠
住吉社 少彦名社 天満宮 神楽舎 孝真栄碑 教恩院
出雲社 諏訪社
小野町 大智院
子字勝手社 紀角社
湊川
城山
傳法
本場
紋羽織
綿
糸
本

吹上
吹上濱
吹上小野
吹上峯
吹上濱汐干
吹上谷
吹上丹浦
吹上松社
網師岡
稼の長者
吹上白菊
報恩寺
蓮心寺
瑞雲院
玉泉房
大圓坊
玉林房
惠空寺
護念寺
大恩寺
大泉寺
明王院
今福神明社
秋葉權現
富士淺間
天滿宮
祓殿
延壽院
山王社
事代主
金毘羅
柚掛松
地藏堂
伊勢兩宮
春日神
大多ち
正壽院
護摩堂
摩利支天
元三大師堂
十王堂
大国玉神
月讀宮
猿田彦神
椎日尊
幡磐意上人墓
最勝院
八幡宮
靈舍
淨樓
梅ヶ原
太黒天
稻荷神
三ヶ寺
觀音堂
松林院
觀音堂
玄旭上人
三十番神祠
鐘樓堂
掛雲院
狐塚
慈教院
一ノ社
經藏
稻荷社
妙法寺
位牌堂
成就院
黑書院
祖師堂
林泉
本光寺
釋迦堂
大立院
位牌堂
本成就院
三十番神祠
妙見堂
祖師堂
鐘樓堂
三十番神社
惣社
歷代御廟
位牌堂
成就門
拜殿
黑書院
祖師堂
惣鎭守
稻荷社
鐘樓堂
觀音堂
齊堂
觀音堂
堀留眺望
丈六寺
淨心寺
光明寺
天王寺
芭蕉翁腰石
春山腰石
三十番神祠
丈六岩
弁財天社
天王殿
稻荷社
開山堂
漢
樓堂
高松寺
少し揃投之碑石
井原神社
眞光寺山
寧須神社
東漸寺山
位牌堂

寄合橋　内町　淺へ架ル

當津の眼目此邊の風景
まるもみのもれもなくて誠に江南の一都會とつちざる
なれのたえまもなくて金城の小邊にあり橋上の行人

合離

望君山城

大藩尤貴顯ある季君山城南海鎮巖在　東君廟壮
成魚塩元有利草木豈無栄仁政聞裏内士民諷詠情

紀藩　桃林

寒月やうえる城よ鯖の声

綿糸　こゝ中の産物なる中にも綿糸は山城ぬ國ぬ府の恩家ぬ皇恩ぬ地ぬ岩ぬ實ぬ
木綿　西国ぬ一ぬ名産にして其性他邦よりすぐれ其のすゝりにあさも野景
のごとく今ぬそのさまをうつしぬ彼ぬ木綿とつくるこゝろ
ちくも麻綿なくいくたぬ地の人ぬ綿よりぬぐるなるべし
近年あぶらをとりて綿の実を搾出しくうつまゝ西府
紡ぎ綿木綿　へ送りて綿糸と製して岩ぬ地ぬ人ぬ
十億ばかりぬ利をうるといふ

寄合橋

謝泉南广生所
贈棉布因憶南
紀祇伯玉

南方奮聞木綿
花奇卉珠勝桑
與麻三尖楓葉
未深霜一寸葵
心欲傾陽瑤水
蟠桃子正結金
堤弱柳花如雪
蜂殼剖時迸珠
淚鴛群鬬來飄
素毛人間一葉
碧梧飛泉女夜
織月前機初傳
海上珊瑚市應

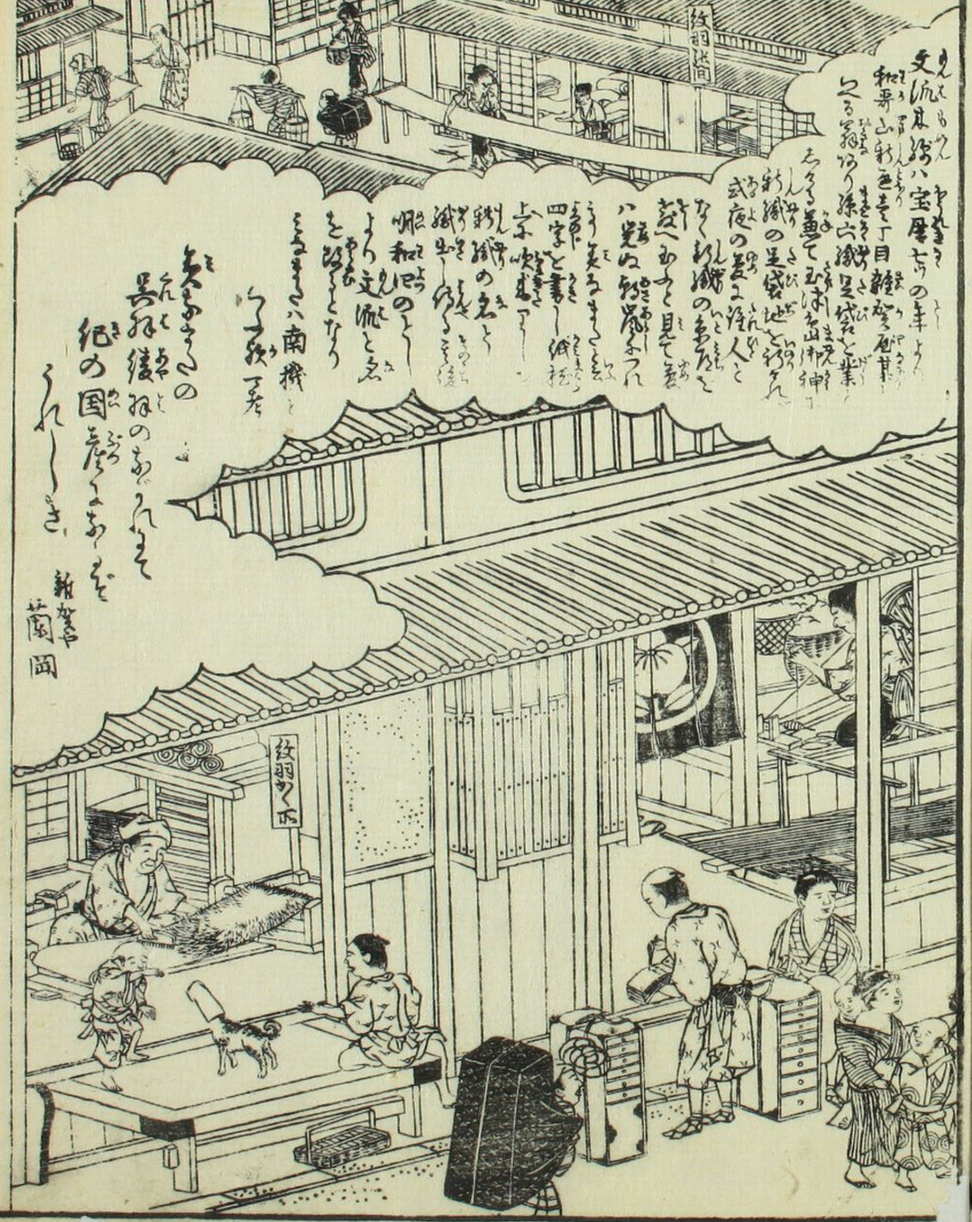


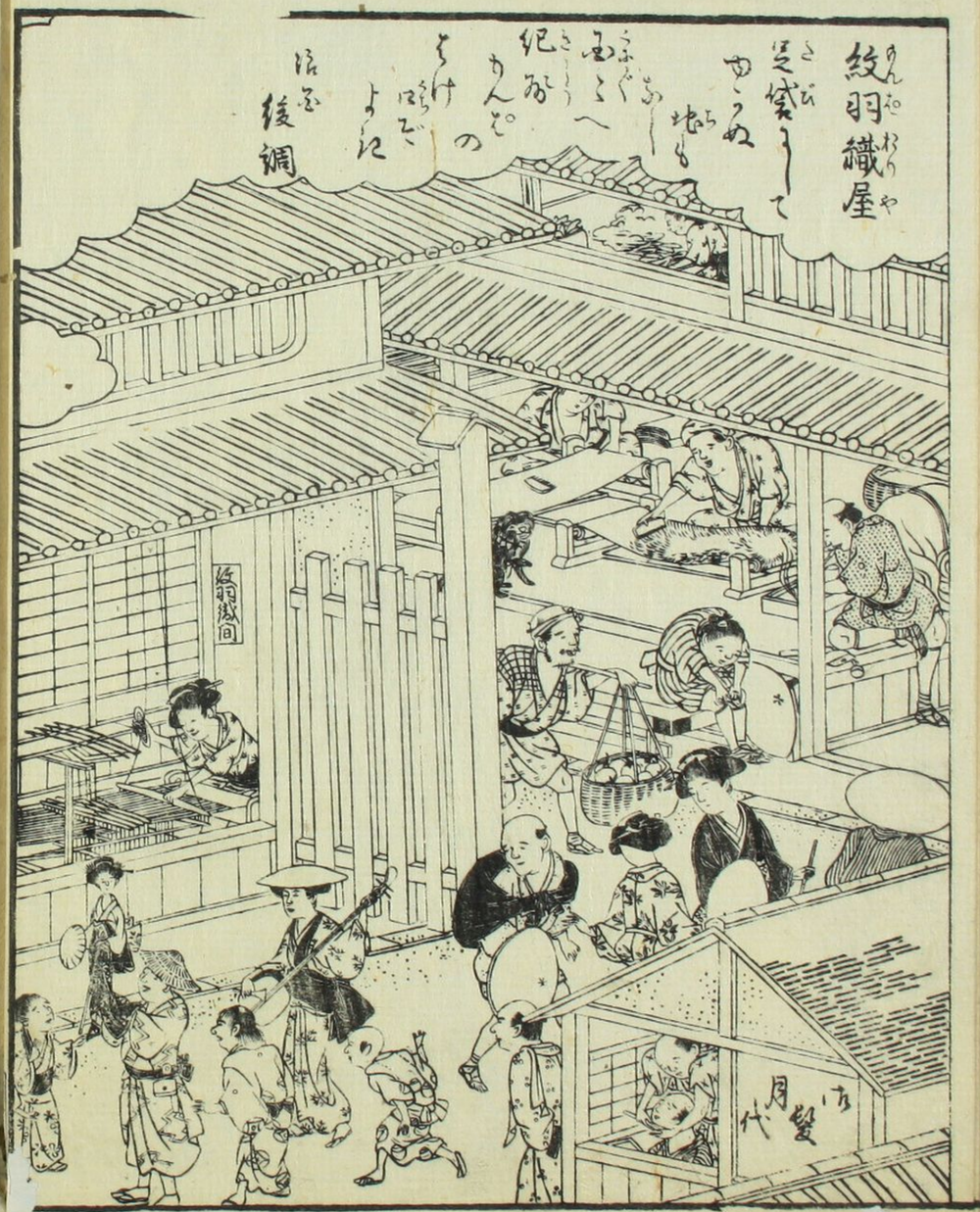
換山中薜荔衣
美人所贈我何
酬南望側身歌
四愁君不都布
單衣公孫作馬
援到日不樂留
可憐老去心空
壯却為平生憶
少遊

新井白石



紋羽織屋





名卅焼陶窯　山口荘雄の山ろく松數して俗ろちうそのまなあるこる中た
類宮　字餘楊のたしづの　樓門　東西五間南北二間あり　講堂　八間に五間
学習院のこ字林　中門柵門あり
奈主の信殺う無
當國上古以来類宮の設なくんばあるべからざる中
葉以後久衰えらくに蒼典のうんぐへものなくなり初
南雜公の當国よりやもうや文帳武黙のまつごと
そうしたるに類宮國家の字育をしてこらぐく
邪くを乎ううを憶よすは海志あんとの思しなりつの大創
業の世のごとくたねよかりなまうよ遠あらだ挙ぐ
右廟卅在藩の日よりめく今の地よ位ふ学舎をいと
なうたまうくつとも当つまで全うらだ
當君御襲封のそのめ
先君の夢志と継やうひ竟よ天的七年有月に命じく
こ以造立すくうるう儒員日くた輪番をりく出勤し藩
中子弟なび庶人のもぐたうまて教育をうくと旦
年毎に授業の級最よさぐし出務のもぐたい特よ物あつく
こ以褒賞をしくうるひなまの其れいも
國君御左國にこづくう臨くことをこるひなまの其れいも
崩重ありかつみる程よ文室日くた答しく俊傑の士國よくち
民を悟の陸よ海をり今にしくまる南方文明のれのねこない
うくことを支をんくうふ我邦学の校を立つくること
の胡よそぐまり　持統天皇　孝徳の朝
桓武の朝よねんぐ生徒稍に衆多なりぐるふ勧学田以
おくくその費に供しなまつ一国書よんてう　淳和性学
の両院い源氏の学館にしく左京約ぶにそじあり学校い
い橘氏の学館にしく橘太后嘉智の創をるところ初学院

を藤原氏の学校に倣ひて
磨い弘文院を設けまつり小野篁に令して
ら文学の設けて年を数となるのそなへなりさらに
いる書の一も支那よりの
ごとく彼くふにそ邦あもくあらざりし享保の
比但徠先生の出利学校を
持つく既ふ翻刻をしさくいやそふ吾邦古文の憲のつた
なくばや

傳法　紺屋町にあり　本尊の導師大圓
こひうけうそ古云われつく大僧法院のおくし
さむ導師の作ふ根まごよ
あるひは大友川にもつくのかり
導師もちく依梶をそとさ
にろうかくまづ

伝法灌頂　門口にくおさゆまる淡行波の碑をうつし

馬ヶ瀬　牧馬を放ちし処なり
牧跡あり
此のうへ西の方に
小豆飯大納言さねかう
武ヶ日ちへ山林を老狐ありて
眼よきつる百歳よりは北斗星
古狐猪猿などしてうちをそ
殺れてこうあるひろこ
こくあるんや

伝法祈雨の壇　此のうへ西の方に
牧跡あり
小豆飯大納言さねかう
武ヶ日ちへ山林を老狐ありて
眼よきつる百歳よりは北斗星
古狐猪猿などしてうちをそ
殺れてこうあるひろこ
こくあるんや

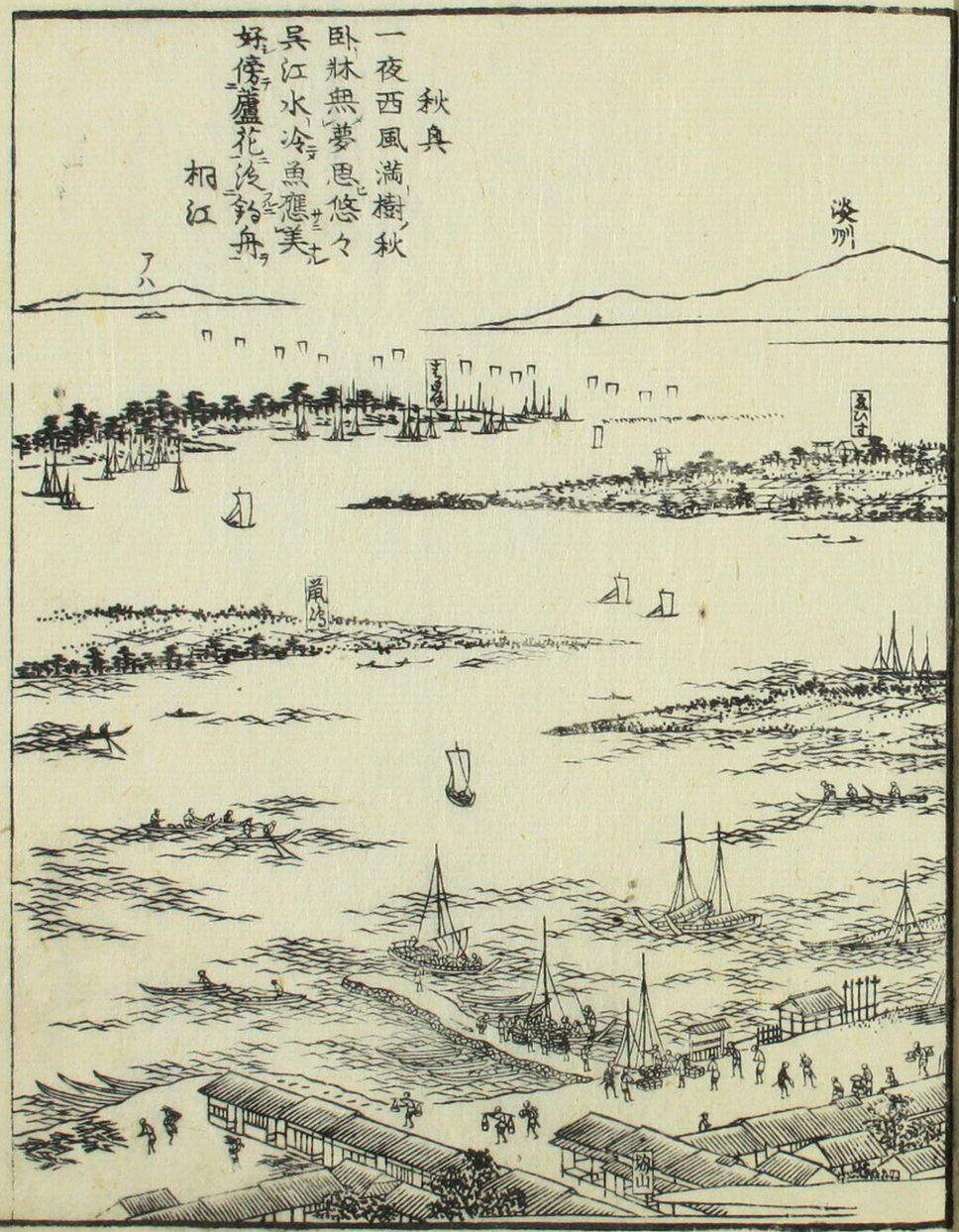
木場　此のうへ西の方に
と楽下りくくれ集て
見るく市成るる

城山　久保町のうる
東にあり
ふるい太文年間中図の探嶺大内義隆家臣陶尾張守

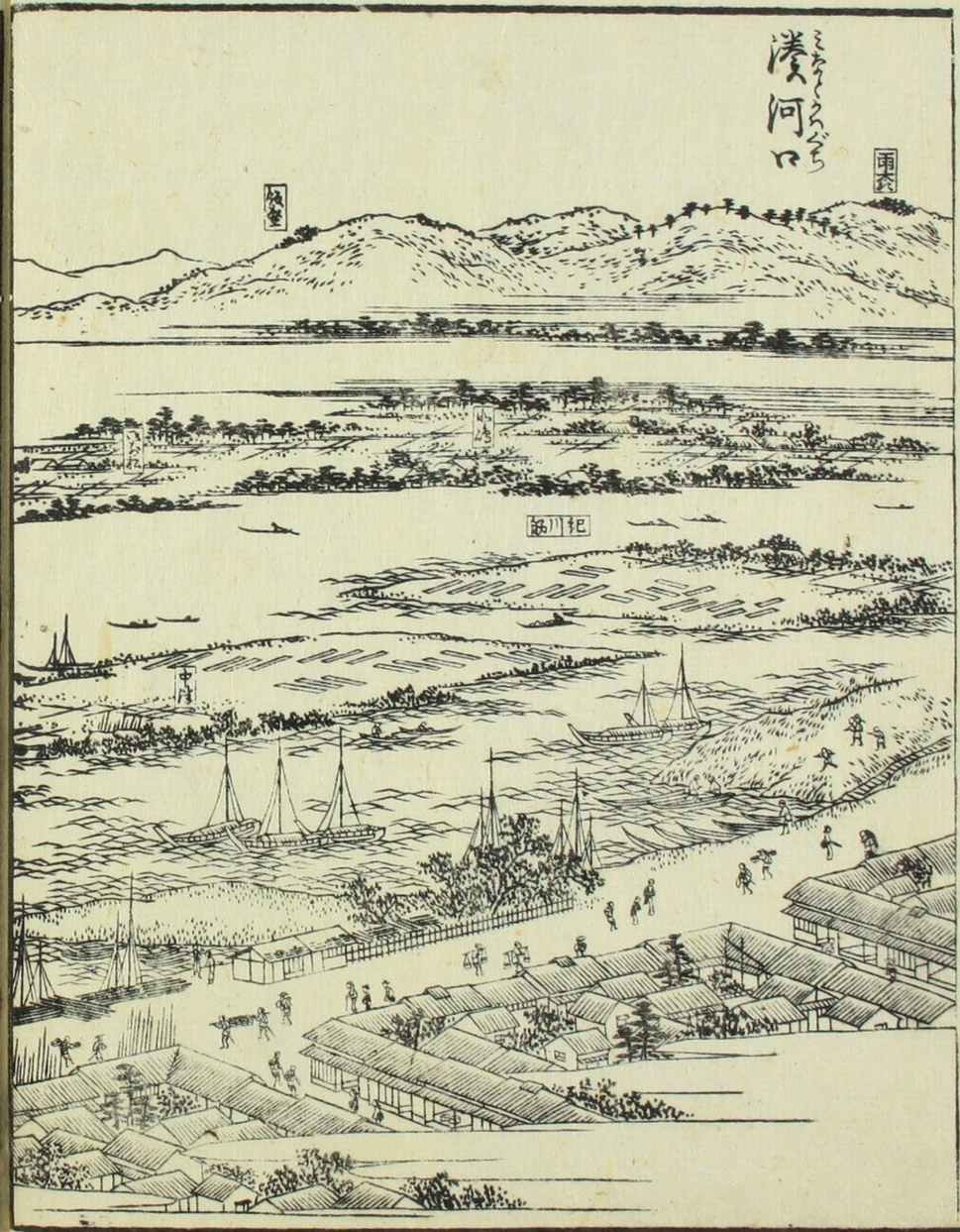
秋興

一夜西風滿樹秋
臥牀無夢思悠々
吳江水冷魚應美
好傍蘆花泛釣舟

相江



濱河口



入逵全善の出作り城跡まで吟上の精舎の辺まで

一堆の畑ふたしく港のかた

る壮観ふつとぞ

二ことあくまうすみ川　漫柱　若山　画雛

まち屋

川口のふるのをいつくしく

まつ水しく

燈籠堂　涼しさやうち方まうつ船の帆うらく　正秀

蛭子の祠　川口のふるれ林の内よりと

神代よりをかたる　朝網　江戸　貞佐

伊達神社　名所　小原町　祭る社一座五十猛命　千代　加賀

伊達神社

蛭子社

御神楽や

あやうしん

去来

蛭兒神社

末社

八幡宮社

鎮守社

合祭

舞堂

御神樂舍

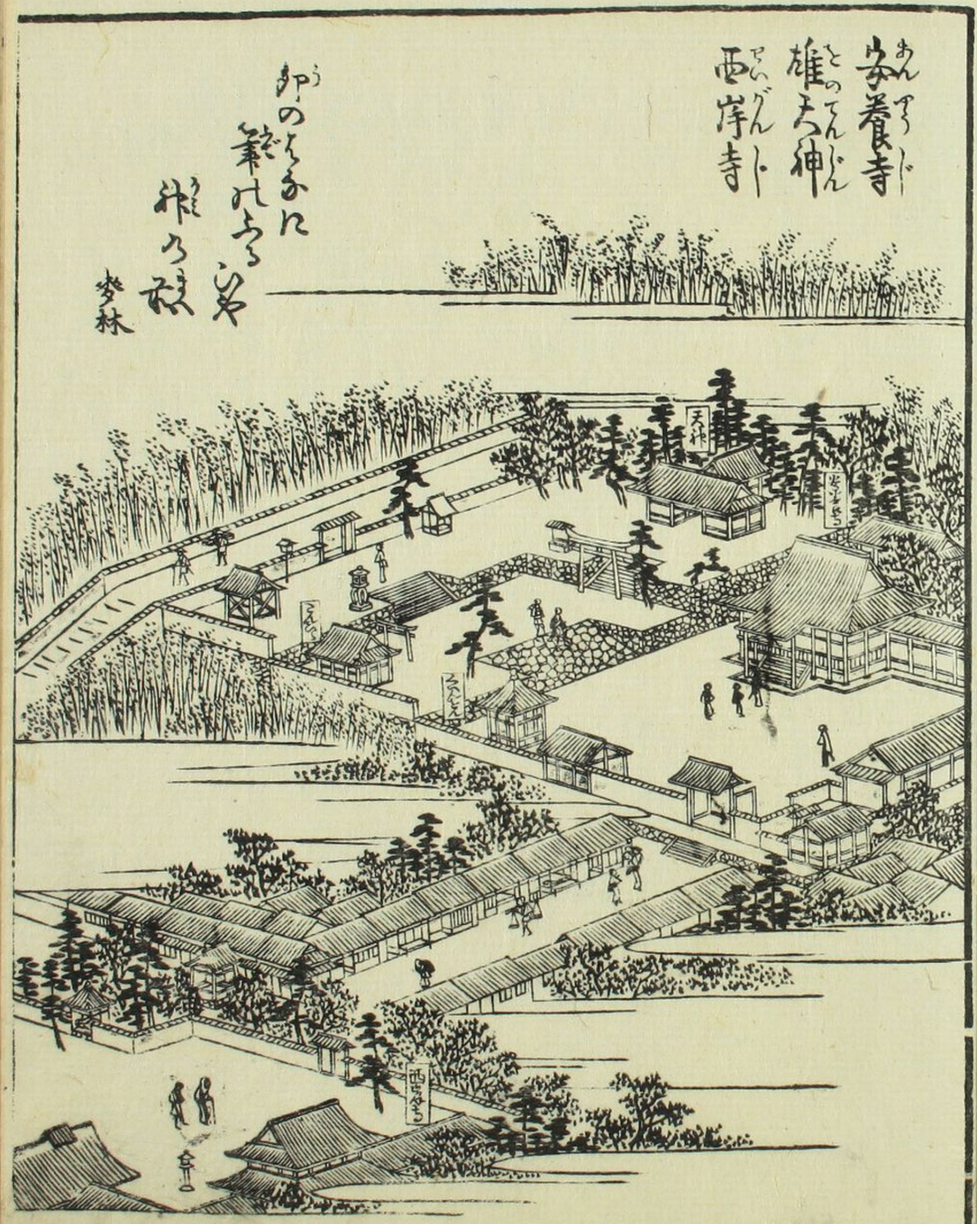
雄之碑銘

小野町

坂ノ辻

王塚山海善寺

梅溪李全直建之碑書



なるよう王れ社の神と称へたてまつるに神功皇后三韓より帰凱まし給ひし時
とゝに男の水門へ引れとくめともたなびかず
和尓申給ひ然る由村よむるより弁
ふるに皇后食國のみなと経ひ
給ひし大師仁明生の御経供の威
て金剛峯寺と号し
ひやそのほか
ほくらも
弘人仏のまうけ
天正年間兵山果報
あるこゝろう
朝鮮國李氏真栄之碑石　元和元年　乾生　國朋覧　十年十
岸和田　大智院　保寿寺　西方寺
塔頭　教恩院
岡寺の供養詳なるべし中ごろ
の住侶なるしが然るに三山へ
和田うの車砂の松江浦の漁師右
来下れくるまゝに
省くるのみなり王船神
とて慶安元年再営して
なるべく
如意輪
雄武神
西岸寺
彫刻
多林

守とゝゐけるが彼地大浪ぐんに打宮ゐるにようて竹ゐ西
間ごゝ小堂宇ゐ立うゐゝゝ西ゐ仏の像刻ゝゐちうめ
小野山妄養寺 小人町南にあり時宗 本尊阿弥陀佛 妄仏作 長一尺一寸 観音勢
至菩薩 脇士共に壽八
寺号の 雄王属大自在天神社 天暦年中橘直幹卿五國の司遷の節勧請
ゝゐゝゐも昔神をそゝ祭しゐ
当のごこの辺伊國男の水門ゐ田浦
とゐ田の浪清浪にようて堆の
地へ遷ゝゐゝなゐふとゝろ
所称旅ゐむ 梅あゐ 残ゐ 跡ゐ ゐゐるまで吾立寄ゝ要魔うもぐん
鶯も 三村とゝゐへむ 麥 村
支也寺の宇妻一遍上人の俗姓ハ伊豫国 ゐゐゐ七鼎道薬の
二男ゐゝゝ雅名を打寄ゐゐゐ幼少より徳の殿培ゝゝ善
根ゐそゐ信あり建長五年ゐ國大台宗の継宗寺の縁教律
師ゐほうへ繋落受戒ゝ随縁房と号ゐ 十九 歳 後ゐ文永元年 九 歳
浄土宗を達上人ゐまごひ名を智真とあゝゐゝ易仏念仏
門ゐ入建治元年冬十二月下旬より然ゐ念仏宗宮證誠
殿に一百日参籠ゝゝ念仏弘通ゐ祈ゐ 此文句ハ然ゐ 年ゐ二月廿五日大往坊の示現のことあり 陽のころ也 碑あり 立ゐ
よう一遍上人ゐあゝゐむ 弟子 法生 のれと諸国の庶民ゐ 残多ゐ十八ケ年のあつご回國 始ゐ
ゐゐ西ゐ終ゐゐゐ二年八月廿三日 横刀 五ゐ庫律 たゐゐゝ遷
化ゝゐもの今ゐ西園法寺那雑ゐの荘小名村のごこれ田
浦ゐゐゐ卅庵ありゝゐ念仏弘通あゐ
らんゝようて庵主唯ゐ 其ごこ 田園若干 ゐゐ 所ゐ
立ゐ後ゐ永四ゝ年畠山右衛門督重忠ゐ舎ゐ再営ゝゐ
時宗今ゐの道場ゐゐゐ
無火ゐ罹ゝ兵乱廃ゐ
吟ゐ年中永田浦ゐ

さて長享中森山果報院此地より移りて今の通仏となる

孤圓山浄秀院西序寺　日本の十刹の一つ　西州

二尺四寸余安阿弥仏作　脇士　観音勢至　善薩

八幡大菩薩　執金剛神

当寺の縁起に曰く往古谷川右衛門なる者山と開山と共に十年十一月十二日寂れ什物と共に大小自筆の画像数幅を遺す大小自筆の画像数幅を遺す人皇百八世後陽成院の御宇文禄二年癸巳の冬十月廿日

林賞山憶西院長覚寺　日本浄土宗総本山　本尊阿弥陀佛　坐二尺四寸余

寺傳に曰吉田兼右卿法印誌されし開基にて始は天台の

道場なりしその俗姓と北畠権中納言具教公その先を

人皇八十二代村上天皇第七の王子二品中務卿具平親王十四代

従一位准后親房なり親房嘗て暦應二年南朝私分の

神ちる小のとも艸なること自ら林賞抔悦亜翁と号し

世の翼塵をさけさらんとて寂寞をあるんじけるとぞ

父師重ず十七回の遠忌をいとなみ石塔婆をたて

今に寺内にあり　まさ矢の神を再興して延

文四年四月十八日行年六十七歳にて往生せり其のち二代具

教の代となりて伊勢国司北畠信長と戦ひ

合戦やまず永禄九年十月和睦のことのひ信長が二男信

雄をもらひ具教を婿とす尋て文亀元年五月具教入道して

法諱を超覚と号す後法名を超覚五男ありとのく

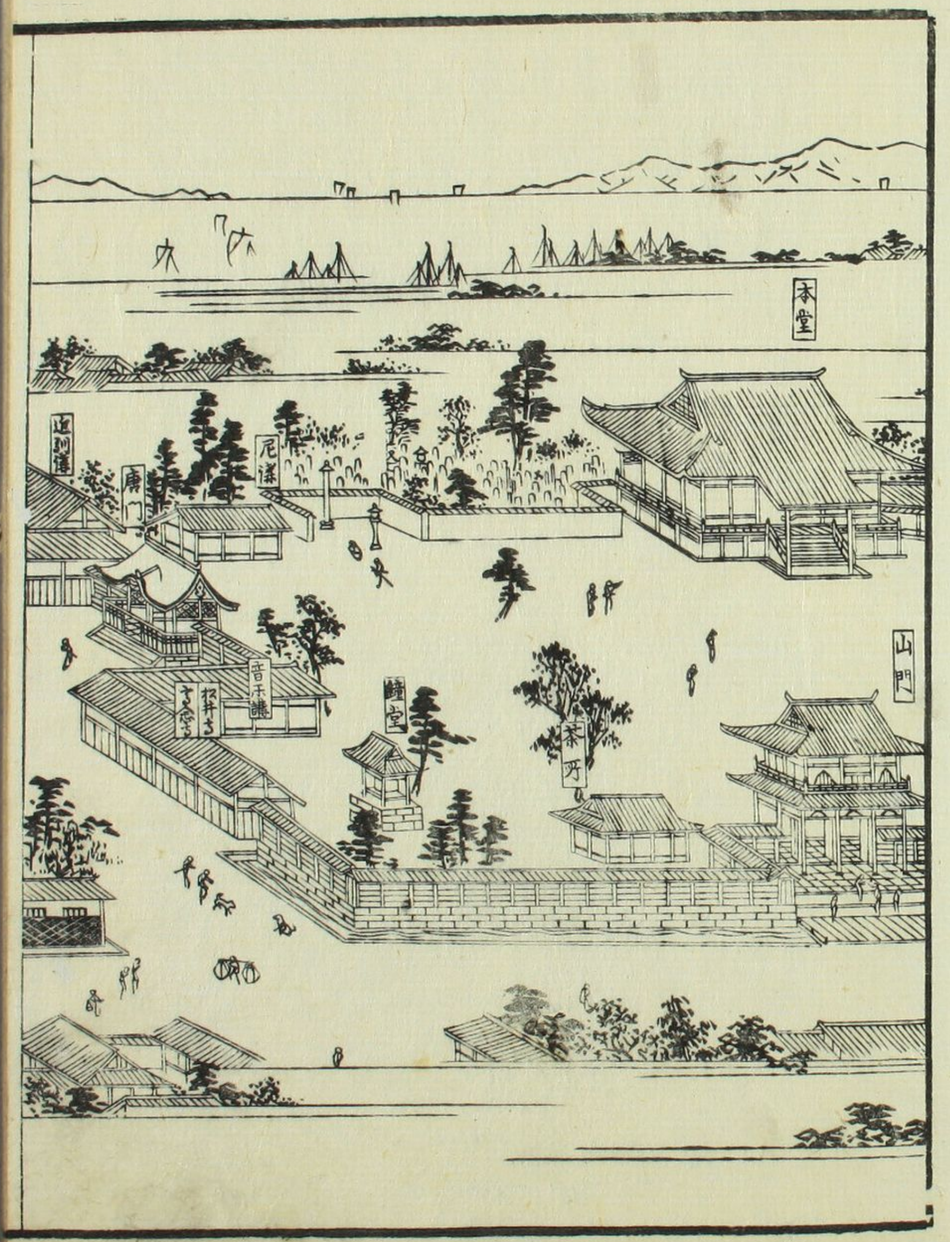
信雄をうとき卑ろうあり卑ろうあり

にわかに信長大に激怒し天正四年十一月廿五日軍を起し

不意よりそのいとまあらばこそ支ふることあたはず密に囲を脱して

伊勢国多気の山奥に隠棲をきこえ其あとのちのち遂よ

私奇浦にさすらひ親房と号しよつく造立し親房



東本願寺
湊御堂
自庵
長覺寺

永き日や
遊ぶに
飽も
なう
ト校

北畠の屋敷跡は勢州山田
宮川の西一里許上多気
村という所にていま
七幡宮の社地となる
境内のわれ樹古う
三囲そなえて侘ぶう
なる一株という
時変じて三株と
なるかこ囲ふや
當寺境内のわれ樹
三株うるおうの色
寺というべし

元亨参年癸十一月廿八日 貞恵

二十三下

林営こゝに院を憶ひ弥勒寺と名ばけて天台止観と
修しるる月八年四月十日大坂石山合戦に
石山炎上をあつく南面より
に土橋平治郎みるの已終歩
もくまつもこれ後の沸坊と
なし錦本孫市田中三郎左
雑賀なる名代ものども家も
し奉りなふ信長さしたか
てこれを追討む終歩
つくもの物に敵をることあ
主父子に真宗の滅亡今こ
祖の御真影に故の手に渡さ
ごくしたるもの父子に真

二十四上

其中にとびつゝとちゝ一形よ孫市体なつゝ常に超覚法印
にまさるく文ざしうべけゝ急をたげゝ助力をゝにまさえ
より信長よ深き恨あまびたゝ太ゝこゝ許諾セゝわゞた
二人をびゝゝもそうて五へ由布門主よ義びゝゝんとそゝん
かゝゝゝるようあゝさゝゝゝ顕如上人御衣の袖
をうびゝゝもひやゝゝようゝゝ勿体なくもゝ祖今上まで
四ゝゝ他力本願のこゝやふ末世にあゝゝゝ滅亡さんとうゝゝく
も恨ゝんゝゝにいま代門徒のゝゝゝ遺ゝゝ変セたまへ御真
影にゝんをおゝち御記念なるふ悲歎の手に生ゝんとゝ祭さても
るをあゝりゝ山びゝゝびのすゝめよ仏法のゝゝよ仏止るべと
のゝゝゝよ門徒おもゝゝふ涙をなびゝつ言契ゝゝくて唯称名
とびなゝたるかゝゝくあびさゝるゝれば門徒本上人をゝゝ

ゆゝゝも弥勒寺山にうたゝゝまる教如上人ゝゝゝた御思案
をめびゝゝんいふゆゝて長秀に託ゝゝ和義をゝうそのんとひ
そうに思びゝもゝもうひゝに寄手の兵ゞも有無と論びわを
討取んと追来るゝゝた上人のびんゝゝろもちゝ作よ雑賀
崎ちる砦の巣とへ今厳ゝんたまひ三日三夜びゝゝ御会
来ゝも絶たまへ此ゝゝ不思議ゝるゝ法上よ瑞兆ゝる
ゝ人おゝんしゝかゝにたゝ長刀を以車のごくれゝゝう
ゆゝ故をゝもゝ我ひゝゝに寄手いゝもゝの女人のゝゝゝたよ
びゝゝ退ゝるゝもゝびで遠巻にゝゝゝゝゝ二日京都本能寺にゝゝゝ
ゝ山丹羽び軍中備よ摂紀ゝ法をすてゝゝゝおこゝゝ
にく上京セゝゝびゝゝも危急のあゝゝゝゝ安ゝに属して
御門主ゝゝゝゝ安堵のゝゝゝ

けりこゝろにくもりの安人い矢大石神のに祝ゐ〳〵立へ〳〵うし〳〵み
山下氏淡しく故をるまねらをとさゆくの亜浪あうさ
まゞ共後西帥門主九年八月まで落歩ようてもみひ
しゞそれよりして當らよ稽乞なるし又の年の六月まで乞
なま人此所記覚ゑ教如上人の御勧化を聴聞ちう頓なん
宗よ帰依して帥子ゑとう法諱をあ〳〵ゑ〳〵ゐゑとゐ
こまとう永く喜ゑの紀場ゑちりうち
塔のうんぐよ妙人近ゐ再建あ〳〵美麗ちう日毎ゑ晨鯨のむぐく
より老若の緇素袖ゐ仕〳〵ね幻恩の称名月〳〵れあ〳〵ちをゞ
去此不遠の浄ちもつをし

什物赤栴檀阿弥陀如来尊像 長三尺二寸八分 定朝作の伝つた
関白秀吉朝鮮伝伐のおり〳〵この山に移〳〵仮居セ〳〵らのめの年むよりろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵

天王山吹上寺　濱の町にあり禅宗　本尊觀音　俗に行基の作
當山は古刹にして開基と圭瑞大和尚ともに紀年詳ならず
さぐめ吹上の宮車坂のいにしへ
圭淺野侯馬寺長晟の夫人正清院殿泰誉果悦善方大姉茶
毘の地也　この夫人は神君の御姫君にして
松龍山光明院普門寺　左田家町にあり古へは大阪の北にあり
大師堂　西ふかく四ヶ條ぎをへだてゝ第十七番にあり
阿彌陀堂　本尊のまへに
鎮守社　稲荷の神　弁財天女　阿伽石　また内にあり
地藏堂　本尊その西にあり

光明院
連理松

庭松颯颯也亭亭送
夜聲篦好雨星雙鶴
白一牛青清風令被
幾人聽

十返舎
一九や
雛あそび



連理雲　園祖君のもち殿けし庭前のれんりのうん

鵜寫　上野不忍池弁天の社地にて大半依然のおもかげをうつしぬ
うのしゃ

累世の家あり

卵のたもとを借ものうろ和ぐたな　桃亭

さし鮭そらをしべるる牡丹の舟　鬼貫

恵美須社舊地　牛町　亀ヶ坂　天狗石　門前にあり
名所と云

孤雲山来迎院西要寺　本名阿弥陀仏　法名俊誉上人　慶長中九老の上人を中興開祖とす

當山の古刹にして開基は洋々たり

南岳山安徹院密林寺　大師堂　大日如来　三尺五寸　不動明王
本四ヶ寺の住持　大阪の住持　少し古義

寺性古く山城國深草の里多の岩山の西にあり　法大師二年この所に寺を建立ありと
府城の艮にあたる古名岩上山　今上の山とも　也が山ともいふ

雄の清水　門の西にあり清潔にして寒暑に堪ず
一名一偏歩ってたべて田畑の料とす

日恵芝　堂前の西にあり　日恵上の投ぐやりの光狐よりうまれ
府城の艮にあたる古名岩上山のわくんあり藩士狩猟の場とす

紀人の硯　國君より賜る

紀人の名をうたがう　奇石あり

よく成ものこそうちてそ
ちかき格思廻思一例なんどのまれのものにもあれど地上よいうるく儘ふ
つえだうち引人嘗く嘗くこそを堆しもるる石根踏ふて
終の堆ありよ彼岸名高澤俾の首墨文
のそれもあれど六書の外梵字蛮字のいるるも容易ならず
べくりのうて為ぬ今是をふさらふ
にこれ終らん今の世の穢刷君こつべし

石質甚よいわゆる和泉石というものなり　陸文ちう　旦生
豚はそすぐく　其ぐ　霜甚久きにし　の九よりぐ　ろれまこん

吹上　日渡今府城の西南をつゝまきて白沙松まく吹上く
此吹上の濱こゝつゝ西南の風
一夜のあらしにつもりたる吹あらやこの平地こゝろこゝ常に風よの砂をこゝ上るこゝよりて
上のそらこゝつゝる月のこゝろふくく文化
古詠こゝろくこゝをまき年来四つくくこゝし廃して倉海
三ツそび染田こゝろのこゝ
生る月こゝ家こゝ生くこゝ家こゝ
清少納言枕冊子に
後拾遺　都にくいつゝ吹上の濱
新古今　浦風こゝ吹上の濱のこゝ
に　月をすむ山こゝこゝの風や吹上の千を物こゝくこゝ
日　あまる波の音こゝくこゝる
吹上の濱

懐圓法師
祐子内親王家
紀伊

攝政大政大臣

祝部成仲

新勅撰　吹上の濱

日　浪こゝ吹上の濱こゝ秀風の
日　波こゝる吹上の濱のこゝ風こゝ
續後撰　都にくいつゝ吹上のこゝ
日　沖津風こゝ吹上の濱の白砂こゝ
日　こゝ吹上の濱こゝ
新後撰　久こゝの雲井風のこゝ沖津風
新千載　立波のこゝ浦風のこゝ
日　沖津こゝ吹上の千こゝ
日　吹上のこゝのこゝの後こゝ
日　沖津こゝ吹上の濱の千こゝ
日　朝夕こゝ訓こゝ
新續　このこゝや秋こゝ窓こゝ
堀百　沖津こゝ吹上の濱の暮こゝ

家　隆

前參議教長

藤原基綱

權中納言實雄

定　家

法印　寂信

山本入道前大政大臣公守公

白河院御製

三条入道前大政大臣

光明峯寺入道前攝政左大臣

四條院御製

嘉陽門院越前

永　縁

南五
くれよりの風の吹上の浜よりふる白雪　源資氏
支本
吹上の浜風さむし夜もすがら千鳥の声や吹上の浜　大蔵卿有家
は
きのふやさ吹上の浜よりふる雪の塩もうらにたちぐめん　慈鎮和尚
は
うら遠く飛なく鶴の村雲の吹上の浜風の村雲の吹上の浜　前大納言為氏
は
月影なみなき南よりふる吹上のくもの
は
秋風の寄こそ聞や吹上の浜れ秋やさらけん　後久条内大臣
は
紀のくにやあらのつゝやの名にさへや吹上の千鳥月よみ　鎌倉右大臣
内裏名
集の浜のなぎもなきころ沖津もや吹上のあたりさん　後鳥羽院宮内
市集
松をふく浜風もなきころ沖津もや吹上のあたりさん　後成卿
紫檀
とりもあへず雪ふる浜風吹上のもみぢ
散木
きのくにの吹上の浜よりてる月いらくまがの松とよるや　後鳥羽院御製
山家
波うつる吹上のくもの浦風もすゝろにふろうん　順徳院御製
月清
きのくにや吹上の浜よりふる波のよるくもしたゝまでうめ　後嵯朝臣
飛鳥井
名寄
沢寒くふれる吹上の浜の雪の寄波　雅経
澤女
白妙のふりそふ吹上の浜風の秋の夜のふけ　雅有
家集
白妙の雪吹上の浜風をとつもゝゝ過をとくて　鳥家
家集
吹上の塩風さえくて村千鳥なくまの月影　師兼
家集
吹上や浦風さえくて村千鳥なくまの芭　権大納言為尹
千首
寄寒く散ふる吹上の浜風よりてる月影や霞まさるらん　宋雅
句題
吹上のまつかぜもいたくふけ行ままの月影　頓阿法師
家集
吹上の浜のまつかぜ吹ふけて月影さえる浦の波風　宮内少輔
西槐
寄風の吹上の浜のまつかぜ吹ふけて月影さえる浦の波風　藤原光綱
名寄
こゝもまた花のあしたの春風の吹上の浜の浦の波風　榮雅
建保
名所百首花のあしたの春風の吹上の浜の浦の波風　兵衛内侍
は
沖津風夕波さわぐ吹上の浜のまつかぜ吹ふけて月　定衛
は
まつかぜ吹上の浜のあれまくに都の春もしらなみ月　行能
康光

建保

すゑとをく立ちくる波の雲にもまがふ名所の大尾　後柏原院御製

雪玉　春風ふかうあらそふまがきかな庭　實隆

月　はつるよもうめ咲く上の山ぎはにくもる朧の月の名残　正徹

竹根　とをの間よ又とし浦るをのつ上にたつるあらの夕雪　耕雲

六帖　きのふけふ上の浦もあるものとたゝぬ人なき名所　無名

盧主　然野紀行よき所の国の上の浦ゝ月いと面白し

この浦ゝ入るよくうてあそびつゝ有のそ山のうへもろ

霜うちそゝ人見もそこゝ田舎ちうなくなくのそもの

机のへちうよりあるゝ袁ちうてゐもかなるさ名所

四条大納言公任卿集ゐをみ上の浦ゝ

天の戸をいづる月かげ上の浦ゝ立ちくるものは袁ちの波　盧主

まいすゝのなるひくやうちうけゐのうへもろ

ほゝくゝそゝくゝうつれる月のかげ

ゐなかすこもいとあはれちう

あまのすむ小いわそくる浦ゝ波ちうん　公任卿

本加寺第二世そ的上人紀行

玉やこんちうしもやど浦ゝのあちのおなりみ　宗昭

かつくめの松そくうなそまいすゝのあそびなくうまいくちうよそみのゆくそむちうん

うろ袁ちくわをちうしにくきうつゝくあそこちうのこゝ

ちうちうそやゝくゝちうもあゝにちうけさそゝちうもろくゝ

つゝくゝいまこうちうほゝくゝちうの波ゝ

ちうの浦ゝ波ちうん　少将

ちうの浦ゝ波ちうん　なゝの君

ちうの浦ゝ波ちうん　ちうすけ

中納言ゝそやうの京極ゝと世の中ゆうてゐゝうちうる様ゐ

ほゐ

ちうの浦ゝ波ちうん　ちうすけ

ちうの浦ゝ波ちうん　ちうすけ



きのくにの吹上の浜のまつかぜに
吹上の浜辺の芝ろ名をおもふらん　大将

吹上の小野　中将ときそや

秋ふかみ何ゆゑ吹上の月
吹上や月に
続後紀　紀の国や吹上のさと　渋茅原ちりにし
吹上の浜の秋風
吹上の浜の秋の浦浪
吹上の峰　仲府城
秋の夜や吹上の芝のおばしまに
吹上の浜の秋風

加賀　枝
若小　机
居

後九条前内大臣
中務のみこ
光俊朝臣
中納言國信公
家隆

吹上追加

続古
ひろひおきしひきこもる谷の松
支木　谷風の吹上ふきてる神杉のこずゑもえこめたる朝
吹上る磯野の風やみふへし
吹上ていつねる夜すがら

中務卿親王
貞室
素登

吹井の浦
吹上の一名にいふ泉の国にも吹上の浜のうらにも吹井のうらにも古歌ども多し吹養の義をとりて名づけたるか
仙洞御所にも吹井のあるよしを白河吹上
家集　紀の国の吹井の浦よめる
吹井の浦

藤原清正

家集　沖津風吹井の浦に立浪の
月　むらめ立沖津の浦に立浪の浦ふるらん　廬主

服のうちのとりよせ物あるべきこと

家集　月ふかうとり又あらそふ海のあなたや　廬主

支木　芦間鶴もとしへぬる声を表ちなれこそ世ふりの浦よまるべし　宗蓮

御集　芦辺より汐さしくれば風ふけの浦と思ほゆる　順徳院御製

横山

わらべ川吹みの月ぬよみちうか舟　其角

汀よるもさし〳〵吹井の影　乃古岩翁

細ちりく吹井のうへや〳〵をし〳〵れ　横山

細師の巫

支木　志ら汐を吹上の浜とこそあれ　よみ人志ら

吹上八景

雑賀晴嵐

嵐ふくあら〳〵の浦よ名だ細のやもりくこそ〳〵つ〵

妹山

入日さす塩瀬のうらのいもせ山なほふるあへ波もへだてて

従二位為久卿

吹上秋月

空も海もおなじ秋風きよき吹上の月

飽浦皈帆

すもろこしゆくあし船のこぎ出ても名所山晩鐘

名所山晩鐘

名所山梢霞みて海のくもりあひろみ

紀漆落雁

神津しまの友よぶ帆よあかつき紀の海のこゑようもうとく

形見浦夜雨

あるこやうきの海士のこぬやどに浦潮もあるとき〳〵よをも

藤白暮雪

夕日や雪のうらのふるのそみて沸松とともにたまらぬん

世俗荒涼

吹上の汐干

この上巳の汐干にハ往吉ようらゝ〳〵汐路出もまたるゝ〳〵かりて

淡路へ行んおもしろあらく手毎よ然ゝ結ふのこのとおもて夫ゝ

の奥ふかも素晴〳〵しくもすそをうゝ〳〵妙の女い面の赤うゝをうんやく

吹上の境
汐干

春霄一刻
價千金花
有清香月
有影





肥後北里
一平

毛氈と
ござの内帆や
汐干潟

鬼貫

上り帆の
淺路まるしや
こぶね

去來

汐はひさう蛤漁行貝を負なご小拾ふことよう大浦よりこそ人
なつぬ水もすゝ茎を石おおまき古ものがうをあつまり絶まく春
色にふけりて出てさそふ七とを
汐干うれく磐う神らくえろう舟　嵐雪
吹上の白菊　吹上のそのたありといふ　伊勢　樗良
蒼海変しく桑田る古人朕よ名所佳区の世く沿革をる
こ公嘆ぞるこくくしをお柄う橋お壺の碑うもれく跡のうべた
なれもろ公千歳く杭だ埋まだして今た語りたこうものに紋な
よこ詩小城号るとみくくもうさんが常たしもあるものに賞やだ
しく返て無こその公愛こいうそやをとこ小人みくいそぐ
當世の功名あうしい共人骨と朽こつと竹帛たろしてて
世こた共名公他こうぐしわて今たして共跡うおほと

あなたを論ぞんやこの白菊しもろる共ところ共
花さうちるとくも世くの動揺みもよこく共名いと
うはまべ地の名ようて殊よ挙るのうるべしもこれを
翁やべ菊号公吾久こくくくく常たもだべ久くく
ようさんしも欲たも公よこ常たもだべ久くく
呼こうかるこくくて八雲沸抜よ陸佃う埤雅をしてるい
年鞠たろる鞠い鞠よ
つくた日鞠とん家ちろ花車こたもく家ちろと系
調つよ鞠ままこ養ちろ
手をのづるうとのこまろ我邦もこの後あることを
仁徳帝の朝ちでめく百済国よりこ小公献べ　里人の口碑よ
行幸うく幸ちしたまへわうこの吹上の
うた皇御とくぐめこせ多ひしくた新羅国より五色のお公献ちくこたに
うまーめたまへくりと是日東た菊を愛るの肋ちう字を

帝の名よき菊の花の宴ありかくしてようこの
もの多く名花もまた
享保の終つかた
古人唯白菊をもの
我邦菊の一変
ものすべて近世すべての
菊ともいへ
花鏡に九筒の菊
ものに越人ほど
半 別本の一
うたかわおの次上巻

かくて九月九日こゝにきこゝやしき
まるこゝろなし

ぢむ白ひかりぶ
ろかゝをほちまち
ゐをものでする
にれをやう。その
まものでなう
きてふつのやうな
あるきろの菊をれて
みぐ沖縄
ふるものゝ
秋ものその菊
菊そのようひ
ちく菊のおの
きく菊のちこ

白銀
紺青
緑青
金
砂
紫檀

弐部てのみこ
中務のみこ
五部てのみこ
左大将



吹上の図

寛平のきさいの宮の歌合に菊合せよめる

菅原朝臣

古今

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

従三位為實卿

夫木

花ならぬ菊のえだちかうつろへるあきの吹上の浦のあけぼの

素性法師

月

あだ風の吹上のさ丶ねの白菊は秋のよるこそ花のさかりよ

後柏原院

拍玉

白菊のよるよるごとの露や名にそれ吹上のさ丶ねなるらん

實隆

雪玉

ちぐさ世の霜ともまがふ秋の白きく

家集

さ丶ねもの吹上よりかぐりかけてや菊の雪よりの旬てん

家雅

艸根

吹上の浜のさ丶ねも白菊のうつろふ秋てきくふ

正徹

自然香発句

さ丶ねもの吹上やけふ菊の花

宗祇法師

浪紀菊を蝋ぐうらの干布もの

槐亭

吹上神社墟

西行山家集云

府城の南吹上社地の辺りに屋敷の庭に古松あり

待賢門院の中納言の局を下て暮行春の

山たちのかなたの院の即のほかの都の外の梢こんとそこいく
くくるれそーたちなるあうかくちんくるふ粉川のまわれる
みほんやうに雪あくらけまうくとくく
粉川へまわうたうるかるはつくらをあるまーたま
吹上こんくつぐるうきくと雪く吹上へねにたう
道ようえ雨凡くまうくまうちゃ成よろうくそくくく吹上よ
ゆさはさうなれもえ凡ちくまうたをくく
ゆうつも例うなう外国うちつうよたくをよ
ひはくらかるねをふれのくれりのく社よ書外ひる
えくうそをを吹上の雲よのそこうあるも
苗代みやたさふれ天の川ともも神のみるくー
かく書外うこ西の風ふそうくたちまちふそう
そんくうくく日ねとタノ春の世るんとふさーつりめる

そんをまるーあーなるこ
わうのうねへやうんえくこ
うはれおはくよこ
はつ花の紀伊守お殿人より物ろ
吹上のくさのはうさくものさくく
このつさうう後その日のおわむまそ
まそなちさむのわーきそこちもち
おおんともものんのまくこんそそうてくうう
峠おくのうくうもうとえをーさうちるうな少れうん外くんくと
むとそんたまへーうふおうくくうこうむ
雨のかりたうふくくうちて外つうをくおの人
えさんふるりまーくこのえまわりこうせし
都さう雪上の往たく春れーくのちうこのしこと
あれうつけそうるうくあてまうこ
すこほよそうをおーもつ
ろのうの花の綿ろこりうるみをそ
まくのうやそうこうをようそ歩いるうほく
はのまふひあくさ人より春のうれ仏まつれまん
約春とともくさうそるみーんな世くるん

少将
去しう
あろーのさ
らうすけ
まろうと

吹上の神

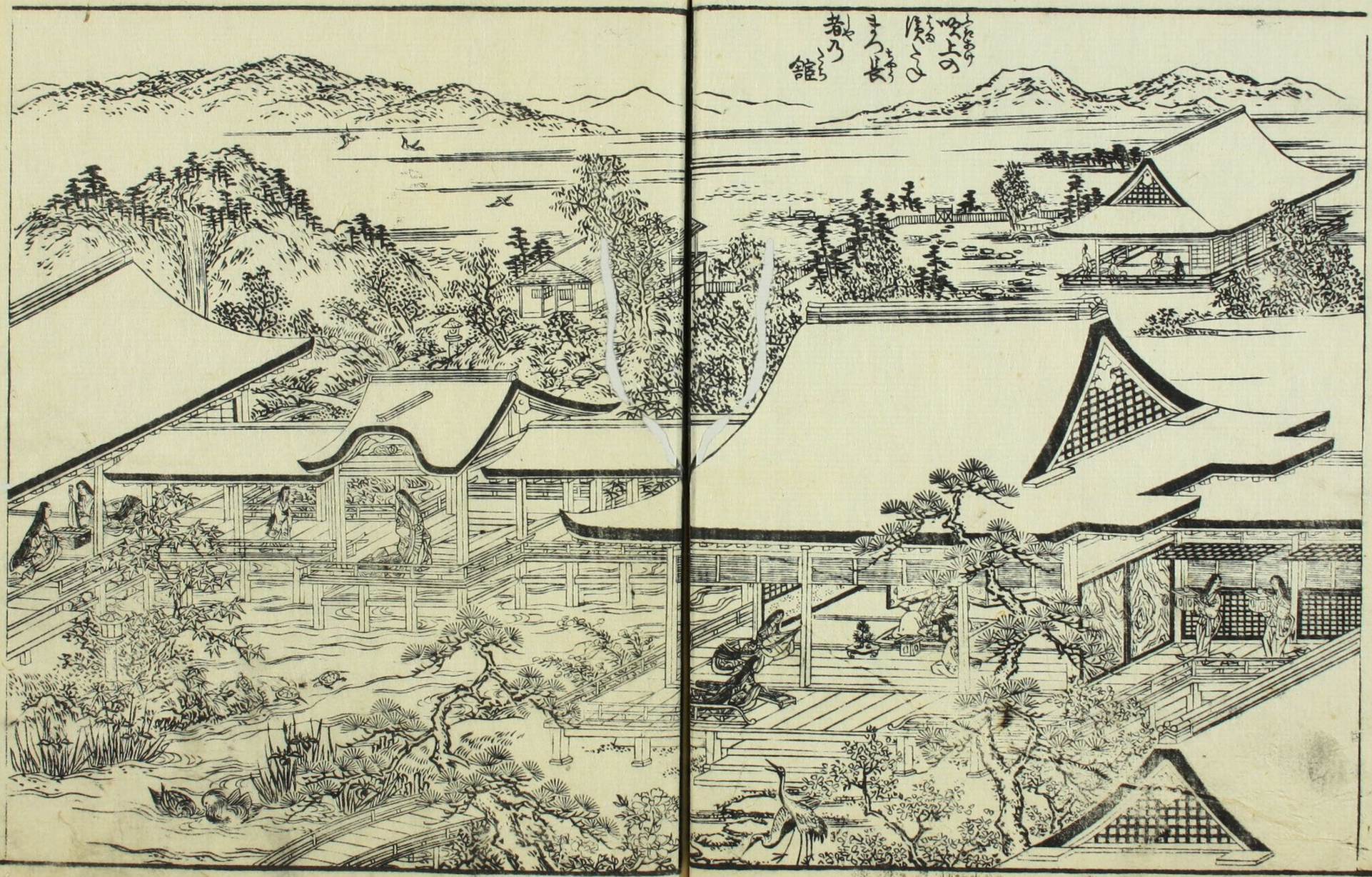
春ごとに手ごとに万代を君にぞ祈る
花さく松もこの春ぞ見る
ほどふれどもいや増しに栄ゆくものと猶万代を君ぞ祈らむ

九 孫まろ長者

宇治わたり後上巻より

かくて紀伊国もろのさうみのたもまりと
つぐ長者うちうちのことにくゑてのまうことを
人にくめらきこみてんにはこゝにおうしかる。そのつゐ源の
あうとかなる大納言のむすめをあよたむことうあへなりけるを。
ちゝもはゝも数もなくうしくて世の中たすことをこひそうと。
さまうなんうちくそのつゐ人にたうまうけるうえに
そくうこおきこうちうちのこうちうちうちうちうちうちうちうち
たうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうち

おもうろたをとえこひもとかくうのおお殿をはこう
みこ四ん八所のうちたこのうきこ。ろのつゐ地とこへろう。ゑろ
うちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうち
かうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうち
のおお殿と造うこうちうちうちうちうちうちうちうちうちうち
寿の山。ここのちむのとにはうちうちうちうちうちうちうち
北のいねのそ中。おのそとうちうちうちうちうちうちうちうち
こたろる花の色本の葉。この世の中たおたをむこうちうちうち
そうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちう
なうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちう
まてはこれもうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちう
給ふをこふきあけのうちうちうちうちうちうちうちうちうち
そのうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうち



雨露に梢わらんから花の枝ごとに笑
壽風の吹上よまれ人の志ごと
ひてそ雫にほふ櫻かな　少將
櫻をそへて旬の村ごとに
櫻をそへて物わかそきほ　學人
人住ぬにほひうつろも櫻をおしやうかう寿のさま
白きこゝろも櫻のことわりのとおそろしき　ふたりみ

さてわたくしもみなみなさんに旬の村ごとに寿にもあらたまの

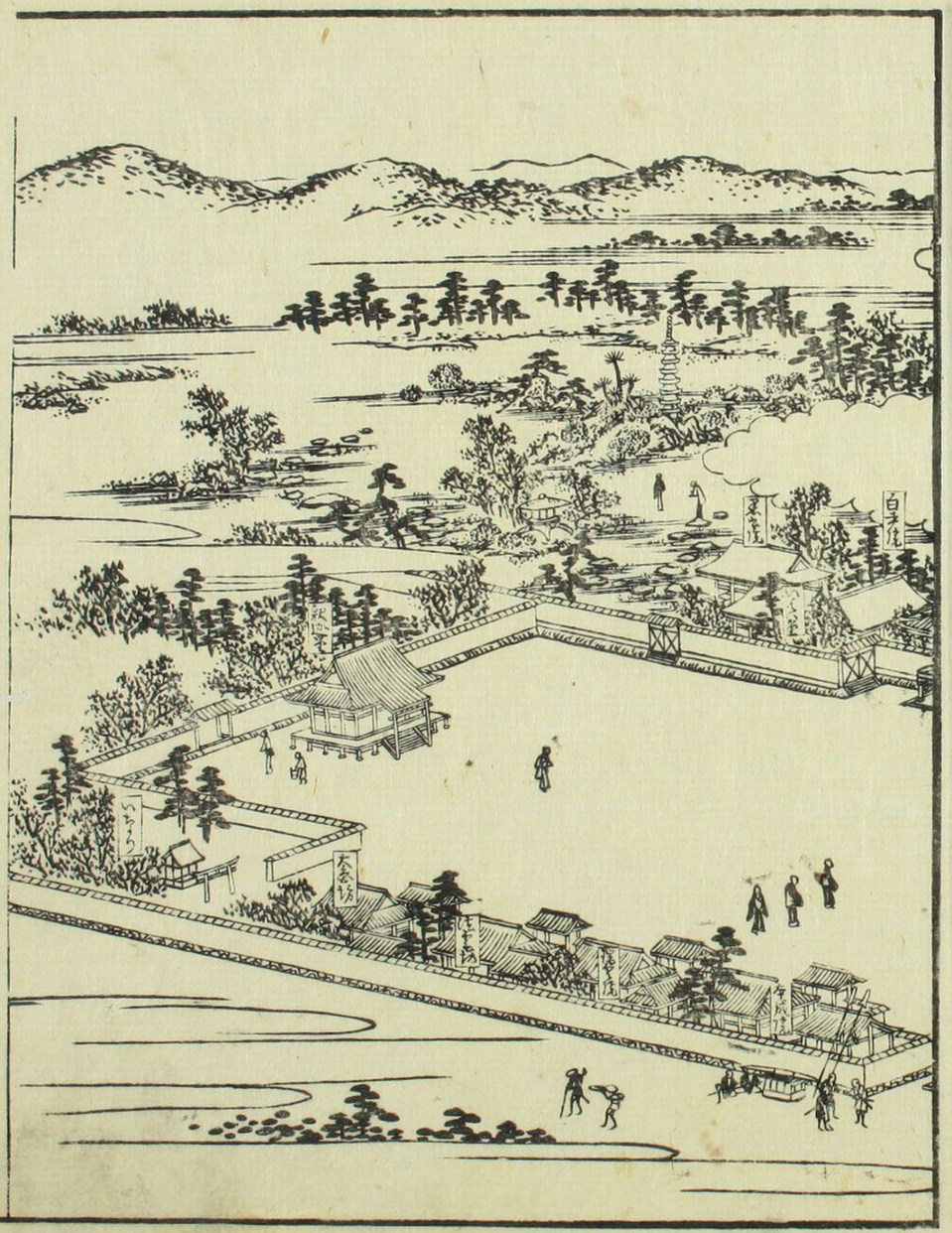
妙見山圓如寺

吹上仙境山の西うしとらにあり　本堂　三宝荒神　鬼子母神　十羅刹女　編笠金甲
法華ふく報恩ました靈妙見大士作ると
まつかたの無熱池の八王ろうたる
妙見大堂　長さ九尺　双手に剣と矛を両ふ亀蛇とをる
かうそくうろのそんぞうなり　毘沙門天　吉祥天
のあろうれ　ふるい　九里ばかり　夷ほこうろ　一大巨石
巫女母神　白檀造の七面大明神　日蓮大菩薩の像と　弘法大師のさくろ
千手観音　日朗菩薩　立像
ましま日朗菩薩さみ　長五尺　世俗お日の名称ふくらい人
八十五ろうの立像たくく　祖師堂
當寺は開闢第四代の大尊

贈三位宰相頼職卿の御母君
真如院殿の御塔御堂
常住つゝの浄刹造立の御志願深く在せしかども竟に其を
果し給はず世を去給ひぬ
従二位大納言宗直卿の御
なまごゝろ事を嘆き
忍寺の本頭僧都日従上人に
其まゝ寺院とゝなりぬ
なまの荘厳日ごとに
白雲山報恩寺 日乗南に隣る法華宗西本寺
昭士 上行四菩薩 及八四天王 脇立 昭檀 左方
九月草創のころ 門右
鎮守三十番神祠 瑞林院殿尊牌 御霊屋 位牌
祖廟并歴代
瑞林院殿御廟 御門の正面にあり 御成御門 是より下るべしのたゝずまひ
當山の起立結構とたゞならず
瑞林院殿浄秀日芳大姉宮
掩葬まゝほどなく御遺骨
ふたゝび納めなまじゝに茅二代の左字
御母君御追福のために
達磨ぶし要約寺の地を收めて新に法華の精舎を創建し是
と白雲山報恩寺と号し
瑞林院殿の御菩提所とぞ
なりぬるにつけて宗旨を撰んで日順上人を請じ開山
導師として永世無窮寺たるべき
寺領若干と寄附人数も開山権大僧都日順上人とかねて
本藩の士石野昌良の子
邸中にあり牧 大守の恩寵とうふもる六歳にして生家

甲州大野山三世日性聖人と師よく学して竜猊
性温柔和平にしてよく衆に
風を法華経誦読し
さらに志をたゆまず下総国飯富の檀林にあまく
五年ならずして上総国小西の学舎に研究すること十有余年
通計九百余巻外典を通達すること十三歳ふして
なく尚時江湖の僧侶上人の右に出るものあること
もこれなり　日秀大姉帥在世のおりより資給ありしところの
かたじけなくも法縁のうすからざるをもて
なを守護上人と称しまつりて
住おわる日　衆内を免されて権大僧都に任じ給ふ
時に広橋兼
けり　尋て延宝二年八月東武に下向し同九月朔
幕府にお請し
帥日服を始めてすなわち尚山のお

特にしく異世住侶交代の永式にあらず上人自享二年城東
安原荘相模村の古刹に退隠し自ら
と号し給ふ　元禄元年九月十日世寿六十四法臘
五十九にしく寂をとなえ
什寶　まる祖師畳四帖日親を人幸る重乾遠三幅對曼
茶羅　大小　吉宗公帥自筆和歌
二本　并画　宗真御帥自筆法華経
瑞林院殿御詩歌　開山紺紙金泥大本尊　并歴代本尊
古哲幸る牧牛図　大涅槃像　赤栴檀の像釋迦
日蓮大士御作大黒天神　陳子昂墨跡　此外古書画数多
佛作也　弘法大師墨跡
宮方大学寮帥寄附の
善曜山蓮心寺




運心寺
門前の姿を向ふより
近江
文素
本堂
表門

祖師堂　本堂の西にあり　すなわち傳教中興日盡大士の像
本堂のにしにあり　すなわち傳教中興日盡大士の像
養珠夫人の位牌　釈加三尊　脇士普賢　虚空蔵　文殊　観音　勢至　地蔵　十六羅漢　鎮守　毘沙門　弁才天　鬼子母神　大黒天　以上二十八体　木像
養珠夫人の位牌　釈加三尊　脇士普賢　虚空蔵　文殊　観音　勢至　地蔵　十六羅漢　鎮守　毘沙門　弁才天　鬼子母神　大黒天　以上二十八体　木像

鎮守両運三十番神　本堂のうしろにあり　木像
鐘楼堂　本堂のうしろにあり　木像
釋迦堂　本堂のうしろにあり　木像
位牌堂　本堂のうしろにあり　木像
黒書院　本堂の東よりのうしろにあり　木像
黒書院　本堂の東よりのうしろにあり　木像

鼠塚　神輿を祭る　なかに鼠の木像あり
鼠塚　神輿を祭る　なかに鼠の木像あり

子院七區
子院七區

當山三世日叡妙法尊者第十四世良應院日盛上人
當山三世日叡妙法尊者第十四世良應院日盛上人
養珠院殿御ゆかりの淀河原手
養珠院殿御ゆかりの淀河原手

茅葺七十坪内外半
茅葺七十坪内外半

つぼを造建あるもなかりし日盛上人なり　茅葺あり
つぼを造建あるもなかりし日盛上人なり　茅葺あり

國祖君　御入国ありて諸堂寮舎方丈等ことごとく
國祖君　御入国ありて諸堂寮舎方丈等ことごとく

こわれしをもとの人別紙に委しく
こわれしをもとの人別紙に委しく

造営ありし當国にては
造営ありし當国にては

一風家屋うつくしき檜花垣にて
一風家屋うつくしき檜花垣にて

庭中の池の面に水仙咲みだれ秋冬紅葉の月白く
庭中の池の面に水仙咲みだれ秋冬紅葉の月白く

しづかなるありさまなり
しづかなるありさまなり

四季ともにおかしきところなり
四季ともにおかしきところなり

慶徳山妙法寺　日本山角にあり　法華宗
慶徳山妙法寺　日本山角にあり　法華宗

當寺も名ばかりにて僧もなく
當寺も名ばかりにて僧もなく

祖師堂　祖師日蓮大士の像　中央日法上人の脇立
祖師堂　祖師日蓮大士の像　中央日法上人の脇立

眉眼いかめしき日蓮上人にして日尊三祥の筆ぞうり
眉眼いかめしき日蓮上人にして日尊三祥の筆ぞうり

一風斜ならず
一風斜ならず

上人ことに移しくし中臭の風ふくと
上人ことに移しくし中臭の風ふくと

法性山本光寺　日本ひげ題目宗　末寺あり
法性山本光寺　日本ひげ題目宗　末寺あり

鎮守三十番神祠　本堂の東よりあり　天照太神
鎮守三十番神祠　本堂の東よりあり　天照太神

大宝山恵雲導寺　日本　下総の内にあり　浮宝曹洞派　末寺あり
大宝山恵雲導寺　日本　下総の内にあり　浮宝曹洞派　末寺あり

世尊　弘法大師の作
世尊　弘法大師の作

弁才天　七寸
弁才天　七寸

照信山地雲院三光寺　日本　真言宗西山流　本寺京都の仏
照信山地雲院三光寺　日本　真言宗西山流　本寺京都の仏

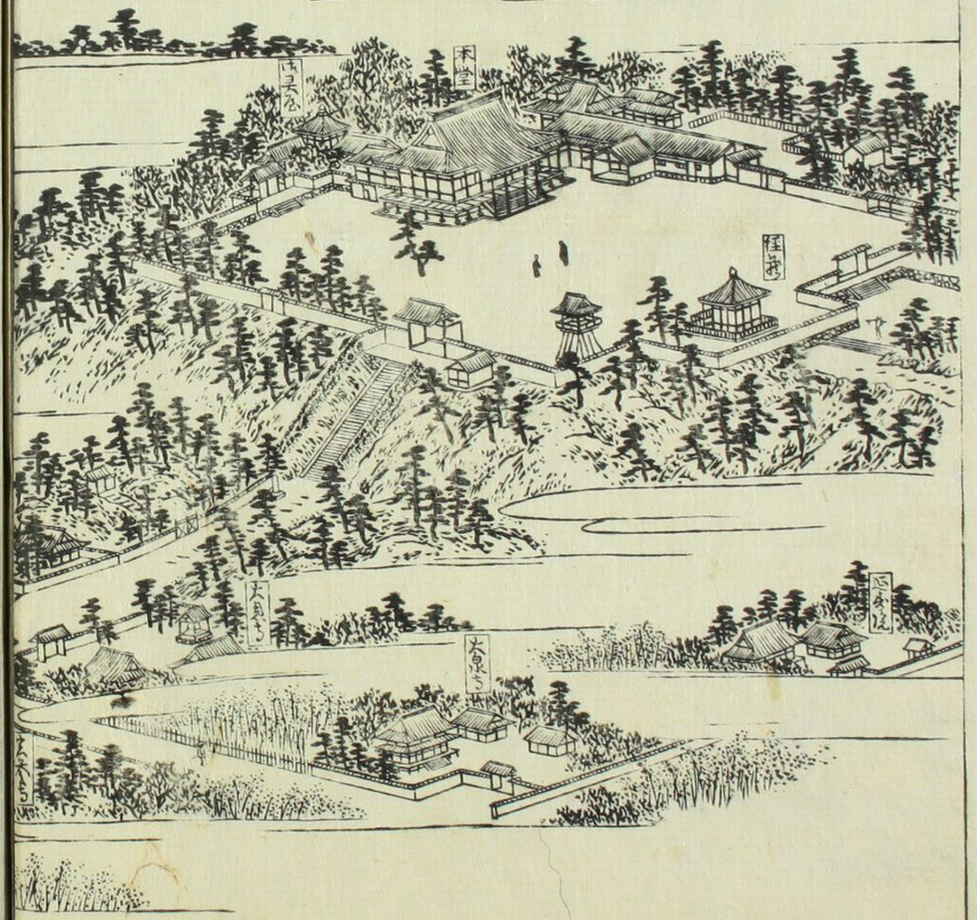
観音堂　本堂のうしろにあり　西国三十三所の第卅番の札所
観音堂　本堂のうしろにあり　西国三十三所の第卅番の札所

鐘楼　古鐘にて寛文年中この地に移すと云ふ
鐘楼　古鐘にて寛文年中この地に移すと云ふ

誌つ山窓誉寺　日本　浮宝曹洞派
誌つ山窓誉寺　日本　浮宝曹洞派

本尊釈迦佛　木像　一尺八寸
本尊釈迦佛　木像　一尺八寸

大智寺
寿昌寺
浅草寺
大慈寺
宝泉寺
三光院
鬼子母神
本行寺
妙法寺
大泉寺
延寿院



寺町や
門さしならべる
梅の花
祐昌



夫をさし
旭のみん
新あり
緑こぶち立
麥林

鎮守社　稲荷を祀る大明神　各遠州より

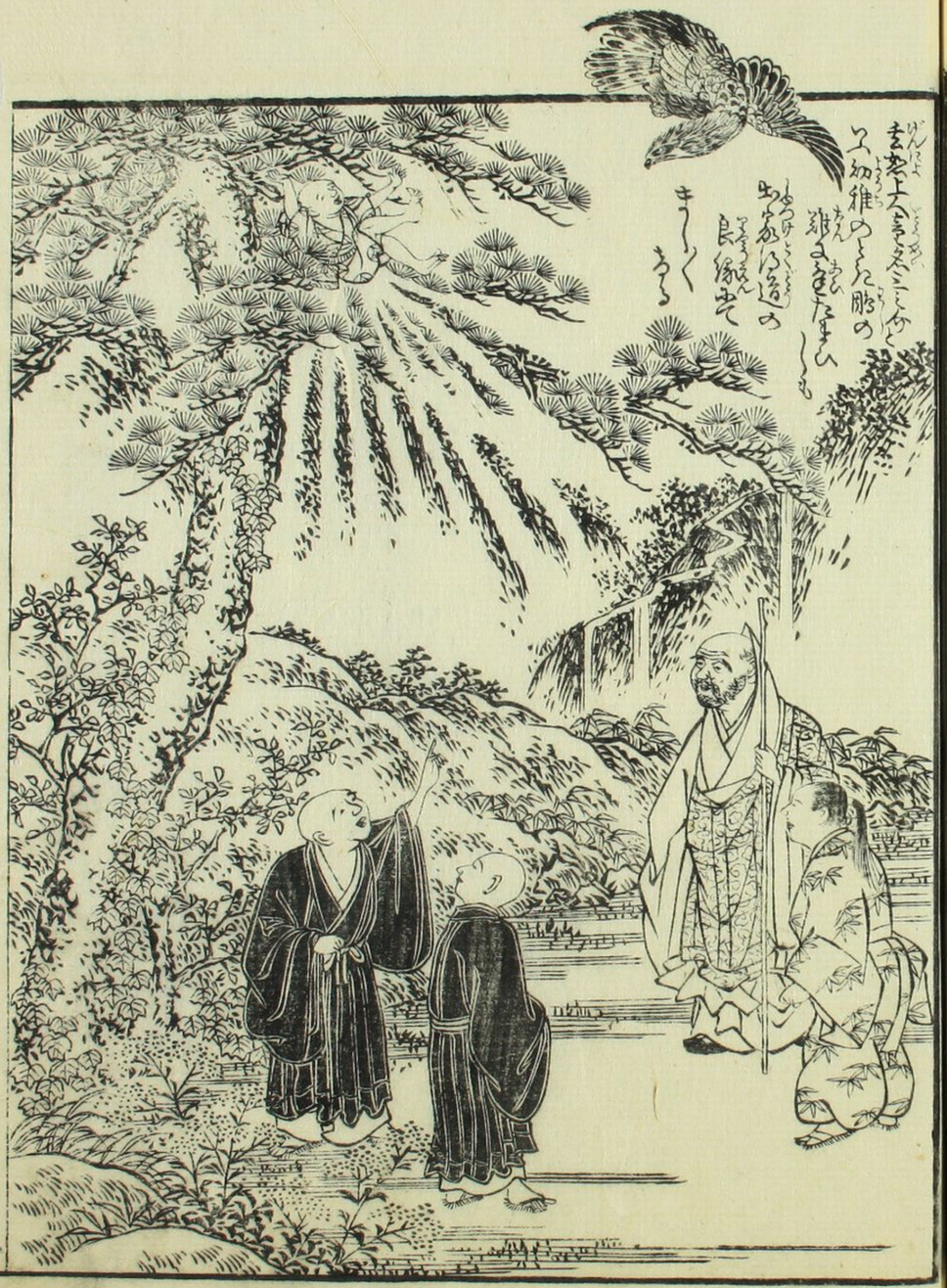
当山へ勧請す年中野外作寮大おるの炉剣ある
猫の奇怪のこと数度ありよう浮き

増上山仏陀院護念寺

本尊阿弥陀佛　長一尺八寸　脱士　弘法大師作　至寶

此尊像は中利生霊像にて弘法大師の御作と山果報信仰ありて
御のくあつく参詣の人ありこの山の奥に苔が峯さ
尊谷のうちに苔が峯さ
こんをそこうる里光のつつの神社いにて
あうくうくうく

蜀江錦五條袈裟
東照神君御在世のおり姫君たち
なるひとを中臈へ念誓を
遷茅
深信山大恩寺
旧の額は
伝西源院筆
尚古刹にて寺記
うあるに近世実永年中
國祖君南蕃花々の顧令
かく採要まちこれ移
植度賀ちもつ是すの
焼ものこと
上人の法徳をうふ
千怒上人
尊像
神正躰阿弥陀如来



まさかと人をおそるゝ
子細雉のくちばしの
疵よりまたなほしも
生ある法の
良縁ぞそ
まことくる

紀集之大智寺

佛恵舎　幸若の舞曲にあり　一切経藏　幸若の舞曲にあり

鐘樓　前亞相頼宣卿の作

當山の宝永年間

國祖南龍公　遠州横須賀侯の小侍従　の佛殿創

よろく開山座を巻き上人の艸創ありし

号ハ俗姓ハ源氏甲斐の未流にて

人なり父母山中たゞ

寺光あつく懐中とぜ

免すされんく最健なる男子あるべし父母が

くさ〳〵と寵愛して掌中の珠を弄するが如し

長ずるに及ぶや園中に遊戯して祥瑞

その上氏嚢の悩も和らぎ

菜こゝろをうく大よ性

あゝだ室〳〵の師を

天下の名識達徳と

つゐに終よその名を

生ゐあるひとも和外曲つ

こゝろ〳〵學業漸く

林善導もたゞほゝ

こゝも精〳〵始く乗頭位

ゆうさ

なまく父母しのんでまよ先生ちそ〳〵めに共〳〵ちをあ〳〵すべ〳〵くあつ〳〵ゐ仏ま下さ滅ぐそそく〳〵修多白浪〳〵ぶきしぶのちるるばけがこれれおのく〳〵砂五ちを独〳〵ぬなまつくちん上人風ようくおまぬれそ道挟ふろ〳〵こ文ふ

憲法上人の令とうけく拝要寺に住〳〵その初法幢を竪起〳〵て三百有餘の江潮の大衆を領せし偉れ論講の梵規をあ〳〵ひろ多くよう〳〵茅ふ四方にまく法漆天下に普〳〵ふころ

亜相公上人仏作伝〳〵なまつくあさうび終よ南紀よ請〳〵大忍寺を再建〳〵ふ中ふ真つ〳〵めふ琴〳〵尚ちを勧立〳〵て開参ふれ其崇徒〳〵なまつくのごとく法腊や頃くれおんでも称のかゐをいふし隠遁のれりし最ゆう〳〵遂よ志弘快して泉州堺大復寺に退隠ふるれ遠徳の熟ふるところちぢく寺満霊験のつく

智謀く系尚ふ仏ふつく終為の地とやんよ若狭隊のころよ牛ふまあつぐ境域の内蛙鳴をきくくふをうつ〳〵めなまんとあつ〳〵ふ当日ようつて庭中ふる蓮池ふ群ふる粉ふる蛙ふく却を枯つく後ふつくまる〳〵上人ふる仏号弘事修〳〵日ふ大経を課ふるこふ怠惰ふる〳〵つゐ多れ世ふ寿如来陽ふまのふ仏ふはふ六根ふ清ふ仏物の未滅ふ主ふ察〳〵陽ゐ人よ暁示〳〵てこまぐ終ふをふ〳〵ふ遠ふこと

ふつ〳〵人ふつく称ふれふ〳〵ふかふぐ少よ芸利ふ多仏ふ家ふりの詳ふつぐ拶州大祖の豊の人ふ自称の紀号をふてころれ〳〵ふ上人と崇敬〳〵うそのふ縁ふれも上人ふ〳〵ふ〳〵ふ仏ふく〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ

嗚呼流年の世上人の遷化する矢よりもはやきこと

あらかなしかな

曹源山大泉寺　俗に上車坂にあり

昔当地に服檀曇永兄弟住す

松王山延寿院竹林寺　新義京智積院末

本尊薬師　脇士日光月光菩薩　護摩堂　本尊不動明王

脇士　矜羯羅童子　制多迦童子

大師堂　弘法大師真影

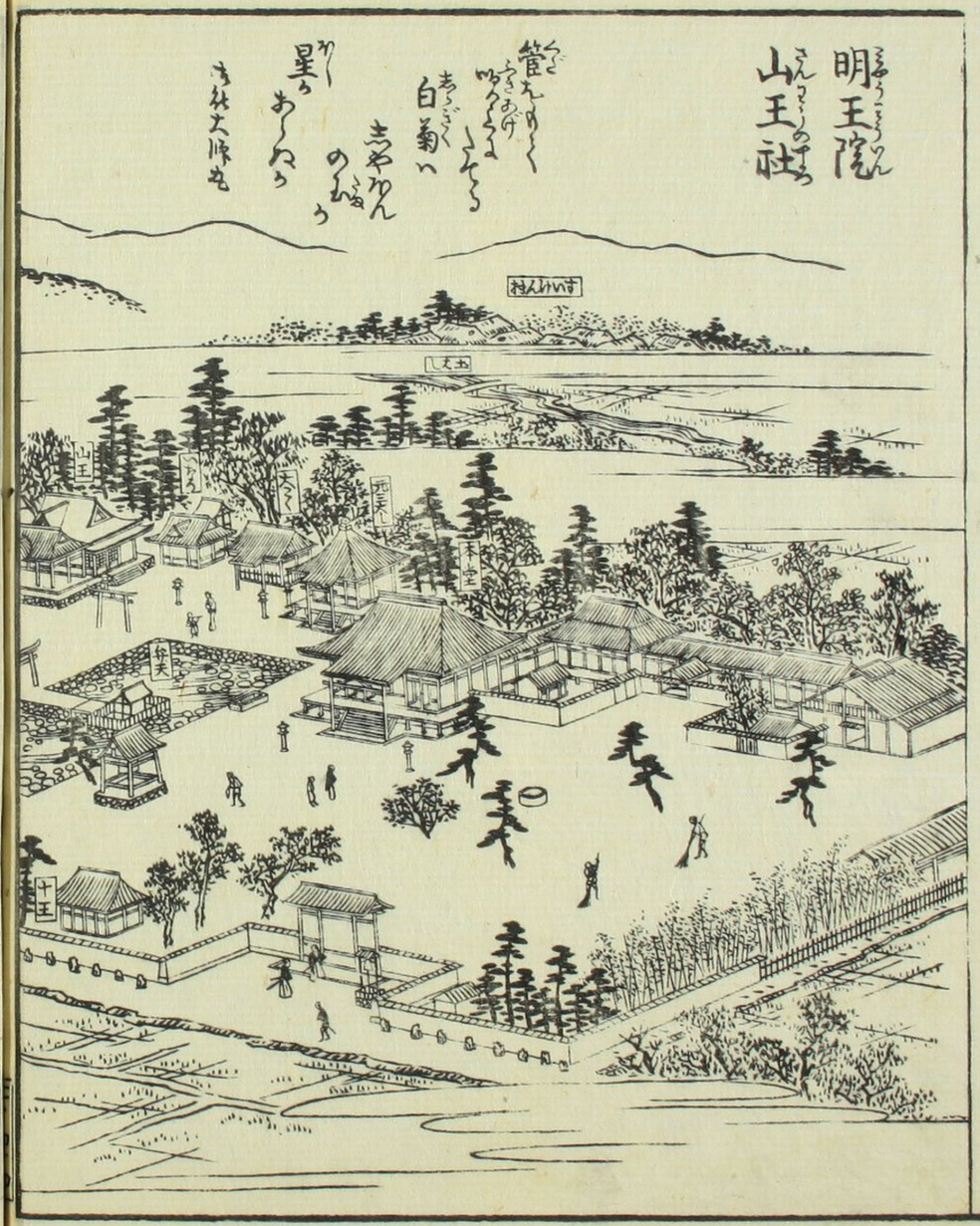
特仏堂　本尊如来　脇士阿弥陀　観音　勢至

梅ヶ原　○海抜凡四百尺

[illegible]

明王院
山王社

管弦の
声のどかなり
白菊い
きやかんの
星のあらわれ
き社大原也



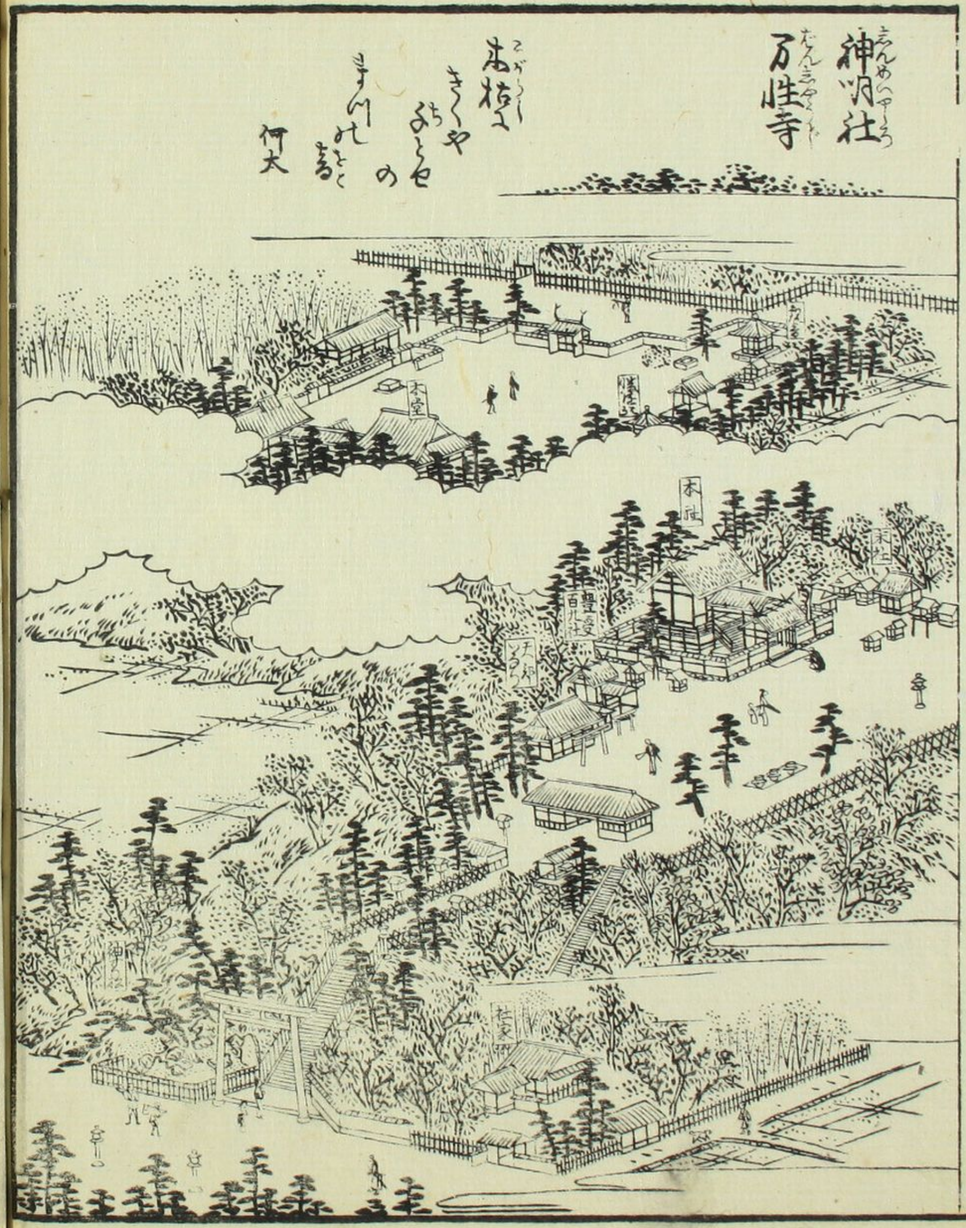
梅の
匂いも
初時
越後 北之

撞てきゝも
鐘あり
佐もの
それの
暮
越後
出



瘦枝こ花嫁さらう風ぞ賞
つころりくい桃ぞんひるくくぞ
そろそま　谷風の吹上にほろろ松のそよ玉
梅花百詠　　渓壽
一帯寒流碧湛神臨流芳樹見天眞倚長映月汀
鳰鶴玉貌感波鏡裏人自得皐蘭全奥味肯隨岸
柳共烟塵雪晴香動津頭路曽約漁郎往探春
自然斎号　　松ヶ雪なれてのそ下ろ春ちるをや　宗祇
吹上やそこそ家ちる毒の花　着山里白
吹上城代のやくにん
保りへ千まのくすし　毛渓々
明院　今福村西にて由
山王社　府城の寺社七社属神十四社合九社一社ハ吹上の生土神ニ而ハ九月十九日ニ
妙好天社　同内の池中に弁天ありくくにあり
元三大師堂　本尊の角よりあり法人大阪のほくくとる
當山冥基久遠ハくくは又びくくにた若長五年法印
長吹中真くくも日恵の山の麓ふあくくと万治年間宮
今福神明宮　新しく西の町にあり御祭礼八月十六日ちり
祀神天照皇太神摂宮　車代主神　倉稲魂命
外宮祀神豊受皇太神相殿　雅日神　大山王命　猿田彦神
万宝壇三十二神　富士浅間神　都合二十四座　是前後の供奉神也
祇園牛頭天王　八王子　八所御霊
當社の蒼地い府城のよりくんより所謂吹上の神ちる地ちり
ほ後出ぬし名づのなくんくぞ
山ももつくんくぞ日恵の山ぬにみりくく
ん山の形が四方便利の地ちるくんの西ちるこの林の間に
ねさくいる端郡のかのくへつといふ
石座　秋葉天満宮　金毘羅権現
左座　八十八座
別宮末社　右座
柚摺松　ちる古松
末社　稲荷神　大山王命　猿田彦神
疱瘡の守神　十王
古神　寿日神

神明社
万性寺



父母に先ち出家ひんことを願ひ
既に二十一歳の春弐月日図玉虫の二作ち仕給義ヲ上
人感ひ玉ひく昨夜不思議の霊夢を感ひ寿ヲ衣乃童
子手に白た幡をたなひくく嘗家の小童ろうろ
女其由緑をとふる日此寺よいはゝん世の福田ちう加ふ
玉ふ夜半諸ひ玉ふまゝ帝釈天の仕者ち
そ〳〵左俗ヨ垂なまふをさにあらず仏子ろう〳〵ち
玉ふ四海のち織導師ろうのく作業ヲそひ令ひく加ち
れ給ふ梁ち幼稚ようの時ヨ上人ヨ扶ヲ上人ヨ扶ヲ
のは幡ヨよたる仏縁ち結ひくち給ふ幡ヨ云と
号なまふ其後仰の許ヲ辞ひ〳〵信倉ち無山ち多ち

愁上人の室ヨ入ひく内外の修ち給ふ通達ひ〳〵超倫のかまヨと
あひ〳〵法戦場ヨ声ヲとゝろふ衆中あひく尚ち
おひようち玉ふ云ふ寿三月寿義三十四歳ヨして頻
ヨ無ち玉ふのかろうことを玉ふち利の学ち通ひ仏ひ心ち修
の外他事ち玉ふたひく幡ヨ云上人の令仏ふ色のたゝめよ
諸国遍遊ひ〳〵上州銚林の刺史柳原ち康政ち
の使よ仰ひ〳〵住ち給ふ南山ち生ち給ふ吾寺ち開ひ
ひて仲創ひ〳〵ち玉ひ下総国関宿ヨ新寺ヲ
開基ひ〳〵ち称ち玉ひ下総国ち田吾寺ヲ建立ひ〳〵ち
ち若ち七寅年仰ち十一歳ヨして仰ち寺ヨ入ち給ふ二十二世
住職ち玉ひく中ヨ衣ヲ縁ひ〳〵ち泰風教浄家の秘候ヲ伝ち
なまふ日九年七徳山百万遍ヨ於ひ〳〵北道住職ち玉ひ言ふ
林のく関東ヨ招ち玉ひ林四の巻ヨ〳〵ち玉ひ

淨称と号す建あらく神田に新智恩寺憐隨院と号すま
ま十三回年武尺然る村蓮生法師の遷化ありし草庵の荒
廃尽ると造建しまま十七回年芳洲公田のをりに隠居しく
つろを創しまま入門まつりて九洲へ従回しまま付き老尺
赤間ヶ関にて新枠とまる病にかゝりて其まゝ逝去
と称しまま其後尚もよく孤剣
逮しまま閑居しまま疾病にかゝりしまま拝為替て
得定の上にてくつろぎ上人は称名の向ひ十念ご唱
なまへてくれ給へ然る別時念仏の意趣なり称
いまだ残念の処なるゆへ誕生入滅の始終ときゝうあつまりも
まこと不思議ちうこと諸芸を兼滅しまま上品まま者の
格果再生をちがうもまま姿婆の再生をねがうんものりさ
称く無疑ふかくとのみしまま澡浴新衣しまま

西にむかひ筆をとめ辞世の偈を書しまく曰く

白道運歩数十年以火消火難思術

書畢しまく筆を擲て令終しまく眠るがごとく遷神しまく
なまへうしちふ時ふまれ元年乙卯五月五日歳七十餘
ぬるうちふ延宝五丁酉年に寺をとこれしまま

堀留の北望

猶すりもろ四方れ墓
おれんぬ
うたゝ生ずうるの
もろうたゝ

金竜山浅草寺

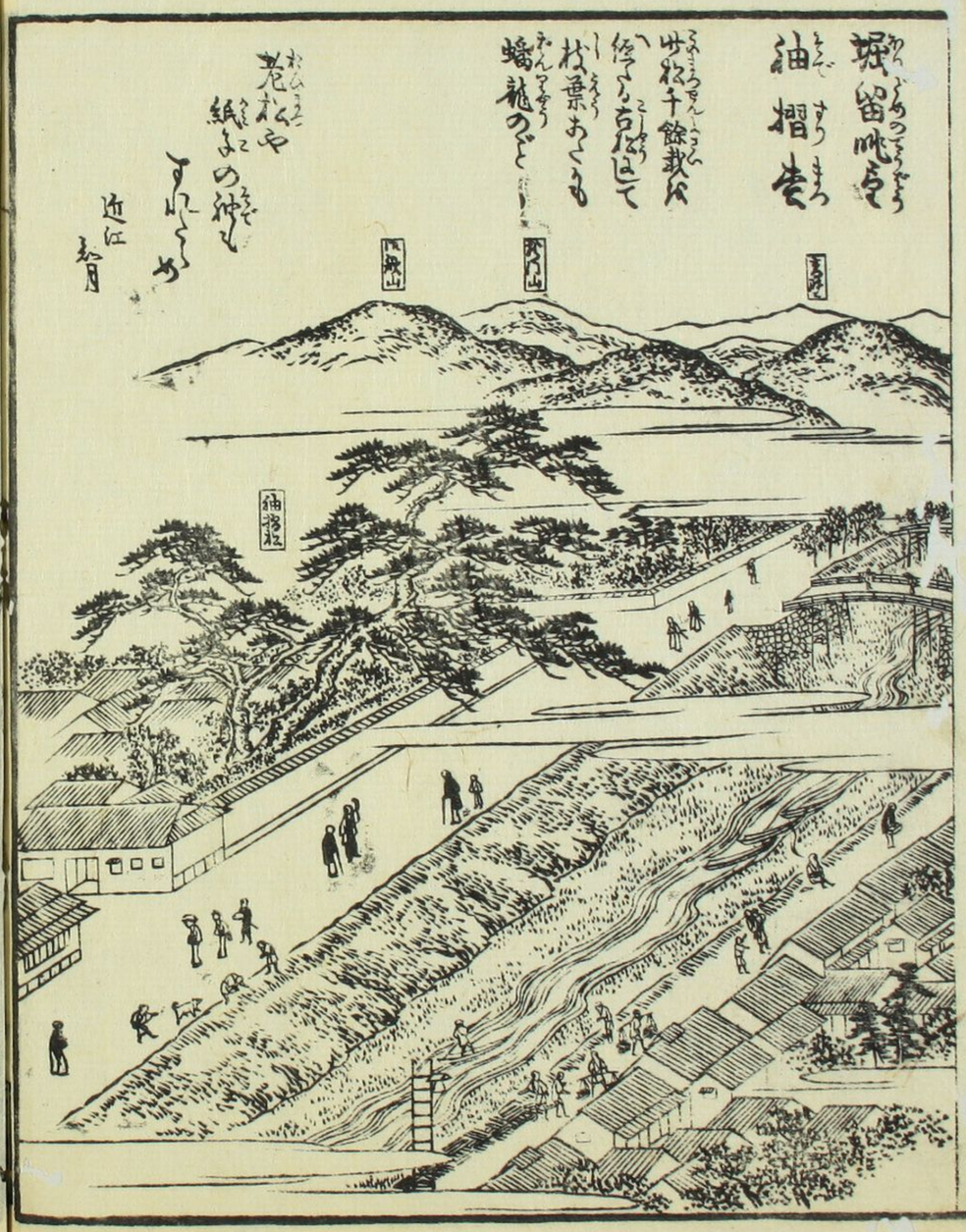
上ろれの
霊魚あしまま
ける

鶴林山称名寺

當寺は芝十七丁祥房
涼しうまま魄しまく眺ものいふなどし

江綿舎吐糸

堀留地蔵
油揚坂
廿枚十餘我が住る古池にて
枝葉あさも
蟠龍のごとし
老松や
紙よの神も
すみよき
近江
春月



角虎山丈六寺　日蓮宗曹洞派　吹上寺町　誉まん屬ス

芭蕉翁碑銘曰

翁云佗無古人と雖古人多此人嘗佗称古池
是古人

蛙啼翁即是古人

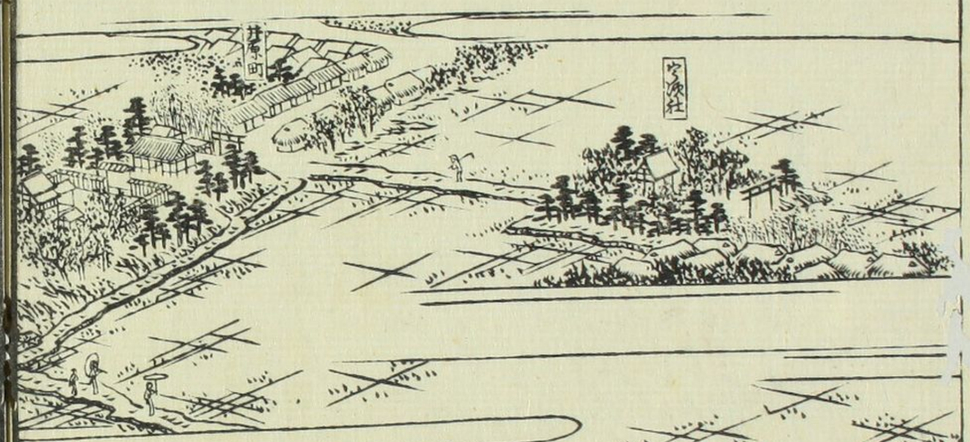
旭岡庵寿山翁碑石

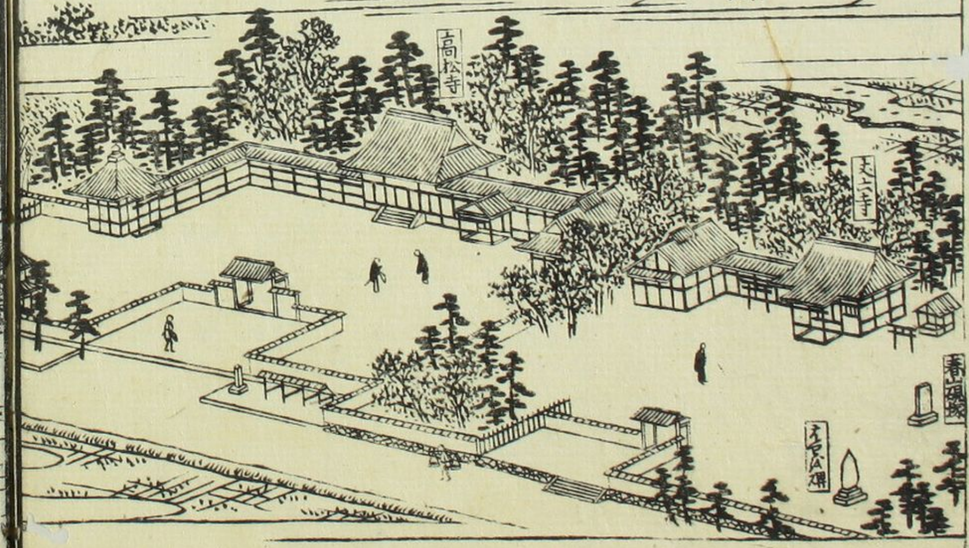
堤亭風怡誌

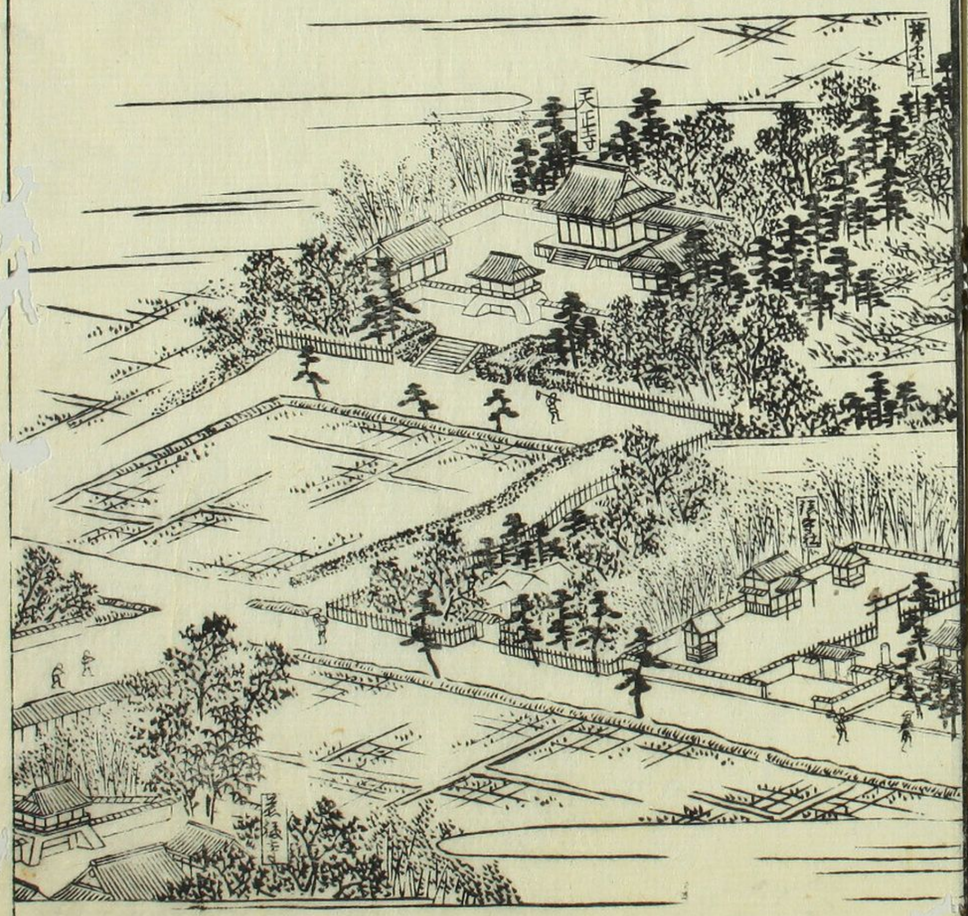
井泉神社　井泉町　生土神　祭礼九月十六日

井泉明神と称れまつりつくれる井泉五郎をまつるものある後の神霊当よりのもと授
をおろくるーろーろーろ

井息明神社
宇須神社
文六寺
る松寺
天正寺







三十番神祠　城内忠桂山の　丈六の岩　忠桂山の西の
當寺へ　國君祈願のため造建あらせなされ精舎也嘗て
えれわれ手　國祖南龍院殿御違例こゝん甚しく危篤ふ
おもひもふひゝた此付　御母君　養珠院殿東武に在て
此よし聞しめされ大に歎きなされ真の玉篤祝命
して御帰國あらせられるを其折の御心労ひなかへ乃ち
御使を馳く甲州太寧山本遠寺日遠上人へ護持の僧を請
ひなまゝこれあらく其後弟忠桂逝ふ應しく玉かふ陪
ふゝ　當府よりも丹誠を擬しく祈念ひしふ未栄な
らぶく　御違例あふ後しく行化虚しうぶらしく程ふ
此隨縁たるをく宇の淨刹を起立し長く国家の安全を
いのらせなまらんとの御事なりしく日　養珠院殿御遺命を
のふあ所くた玉篤を思しめなまふこの寺境村の地をつさ
らるなまた兩山相濯く　華宴を張く長江水よ落まて
煩器ふあふしく其中幽冥にて草樹茂うりちたふ
ふうゝくのさまふ此地の巡邏歩ぐ吾情よ通つうと遙
にぶう　国君よ請しく忠桂をして善幽ふつき桃
李を営しあ日遠上人ふ依て若干の寺産を
ちうまふう上人ふ新こ二堂の奉尊と寫しく海内ふ附る
しくふく開堂傳燈の法席ふ
真光寺山　日村の西より町よあり注ふ
東漸寺山　日村よあり漸寺と注ふ
寶壽山光明寺　日村よあり漸寺と注ふ
幸ふる千手觀世音　鎮守弁財天稲荷神祠

光明寺
漢ニ云ふ
黄葉
猶愚の業

占取ル紀南山ノ水ヲ
宏闊ヘ脅ヒ北ニ門ヲ庭ヲ

通宵　路
兩脇窟門ニ多ル聚也

眼底有疑休縦歩
胸中無碍自通宵

元和三成羊山城国
毘首竭摩の作ふ

光明寺



白雲關　寫門外已無差別路　雲邊又有一重關

天王殿　四天王堂　福地鍾靈特感皇護國　慈門現瑞大歡喜會度人　東方持国　西方廣目　南方増長　北方多聞　中尊聖德太子

無盡虛應　八十三翁圓通の筆　遠風千古播　支那国悦山の筆也　壽壽萬年長

齋堂　禪悦堂　心越　庫裡　廊下　方丈　関山真像　浴室　身心清淨來詳便休　水垢垢塗更須一洗

青蓮居　高泉　地獄何時空願海無盡日　金龍書之　衆生本即佛撥轉有知朝

鐘樓　舊吹上社之大洋鐘　仰序見于園通線下卷　祖師堂　寶壽山　芙蓉猶湛　梵刹建成呼賓王壽無量　舊本尊阿彌陀今置于手觀音毘首　竭磨作昔日在御室請安置寺　祖燈剖起紀現瑞光永明　黄葉四代猶湛

觀音堂　本尊の西にあり　仰塔場　位牌堂　地藏尊

御本山開基山通導師元祿七年の造建なり導師諱源公姓氏と詳にすべき文書なし　第四世なり

獨退わるの上京して
そのまゝ小山への退
淵明の詩を讀て
ものゝ家にかへら
怡の時つゝしみの
五年つゝ諸國を編歴
十年これおゝく居
滿んとして
を城中に致さんとす
の傷を口ゝゝを
僧宏深謝蛮縁不測畢名釗貴巡清代已今
湖海辞莫話野水白鷗眠。
かくて師遠た三大誓の願を滿當寺と艸創あるのち

元禄十五年秋閏八月
亞相光貞卿命により城中に生ず陸坐同會とて勢
なきにあらず園亭語錄にこゝ

秋日過光明寺贈普白和尚　祇南海

三十年前曾識君不圖今復把清芳機鋒翻水千江月
親辞歸山一塢雲。霜葉時兼巢鳥下。烟鐘晩帶本魚
聞自差官海頭都白何日青山謝世氛